

研究紀要

第 17-1 号

2008 (平成 20) 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

はじめに

三重県埋蔵文化財センターは、今年で20年目を迎えます。平成元年4月に設立されて以来、県下の文化財保護をはじめ、普及公開活動など様々な業務に取り組んで参りました。中でも研究活動は、より質の高い文化財保護を行う上で必要不可欠な作業であり、また、発掘調査などで得られた成果を検証・深化させる作業でもあります。こうした成果を、『研究紀要』という場を通じて、県内外の方々に還元できればと考えております。

この度刊行します『研究紀要』第17-1号では、発掘調査における民間機関導入の10年を振り返っての検証をはじめ、縄文時代から中世にかけての論考7本を掲載することができました。こうした成果が、地域の文化財保護や歴史研究の一助となれば幸いです。

平成20年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

目 次

- 埋蔵文化財発掘調査における民間機関導入の10年……………（小瀧 学）…（1）
- ～三重県埋蔵文化財センターの場合～
- 三重県里遺跡発見の大型石棒について……………（奥 義次）…（5）
- －付・三重県内出土の大型石棒集成－
- 弥生時代終末期における遺跡群の検討……………（石井智大）…（13）
- －伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期社会分析の前提として－
- 古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群……………（川崎志乃）…（21）
- 古墳時代機織研究の新展開……………（穂積裕昌）…（25）
- 多気町相可 立岡山・明氣丘陵の古墳出土資料について
（山中由紀子・大川 操）…（29）
- 英虞湾周辺における中世製塩遺跡の分布について……………（山本達也）…（39）

埋蔵文化財発掘調査における民間機関導入の10年

～三重県埋蔵文化財センターの場合～

小 濱 学

はじめに

三重県における埋蔵文化財発掘調査（以後、発掘調査）のうち、県公共事業及び広域かつ複数の市町にかかるような大規模公共事業例えば国土交通省や中日本高速道路株式会社等関連事業については三重県埋蔵文化財センター（以後、当センター）が担当している。本県では、平成9年度から「民間機関」⁽¹⁾の導入を開始した。発掘調査の進め方については、発掘調査自体の民間機関への丸投げを容認はしないという方針のもと、県職員と民間機関が発掘調査現場に立ち、協働して調査全般を進めていくいわゆる「三重県方式」と呼ばれるものである。県民あるいは国民への説明責任が問われる中、業務内容及び積算方法については、時代のニーズに従い変更を余儀なくされている。本稿においては、民間機関導入の契機、民間機関導入の拡大と変容、民間機関導入の課題について、改めて回顧するとともに問題点等を整理してまとめ、今後の埋蔵文化財保護行政の一助としたいと思う。

1 民間機関導入の契機

（1）民間機関導入以前

民間機関導入以前、平成8年度まではどのような調査体制であったのだろうか。当初、いわゆる直営方式により発掘調査が行われていた。つまり、調査担当者自身が発掘調査にかかる様々な事務等すべてをこなしていたことになる。その後、国関連事業については旧建設省外郭団体、県公共事業については県外郭団体に、発掘調査を除いた部分、土工管理や労務及び安全管理や測量業務を委託するようになった。この発掘調査体制については、発掘調査自体に専念できるという利点があげられる。実際、筆者も発掘調査現場で、そのことを痛感した一人でもある。

（2）民間機関導入の契機

旧日本道路公団によるいわゆる第二名神高速道路の事業化以降、平成9年度以降に調査件数の飛躍的な増加が見込まれた。このことから、当センターの人員に不足が生ずる可能性が想定されるようになった。組織定数の増加は、教育委員会定数の問題もあり簡単にはいかないものであることは理解できよう。当センターにおいても、民間機関の導入については、喧々諤々の議論がなされたことを記憶している。その結果、民間機関導入が決定されたのである。それは、人員等の不足時、緊急かつ速やかに発掘調査を行わなければならない事案が発生した場合、緊急避難的に民間機関を導入するというものであった。すなわち当初は旧日本道路公団事業に関わる発掘調査がその対象となつたわけである。⁽⁴⁾

2 民間機関導入後の拡大と変容

（1）拡大

緊急避難的な民間機関の導入が、時代のニーズである「民活」という美名のもと、平成13年度に県公共事業関連の発掘調査にも導入されることになった。事業数の増加があったことも事実であるが、以前の導入時程の活発な議論はなされなかつた記憶がある。いかにも、なし崩し的な様相であることは否めないだろう。平成17年度以降には、国関係事業、例えば国土交通省関連、農林水産省関連、中日本高速道路株式会社関連の事業についても民間機関の

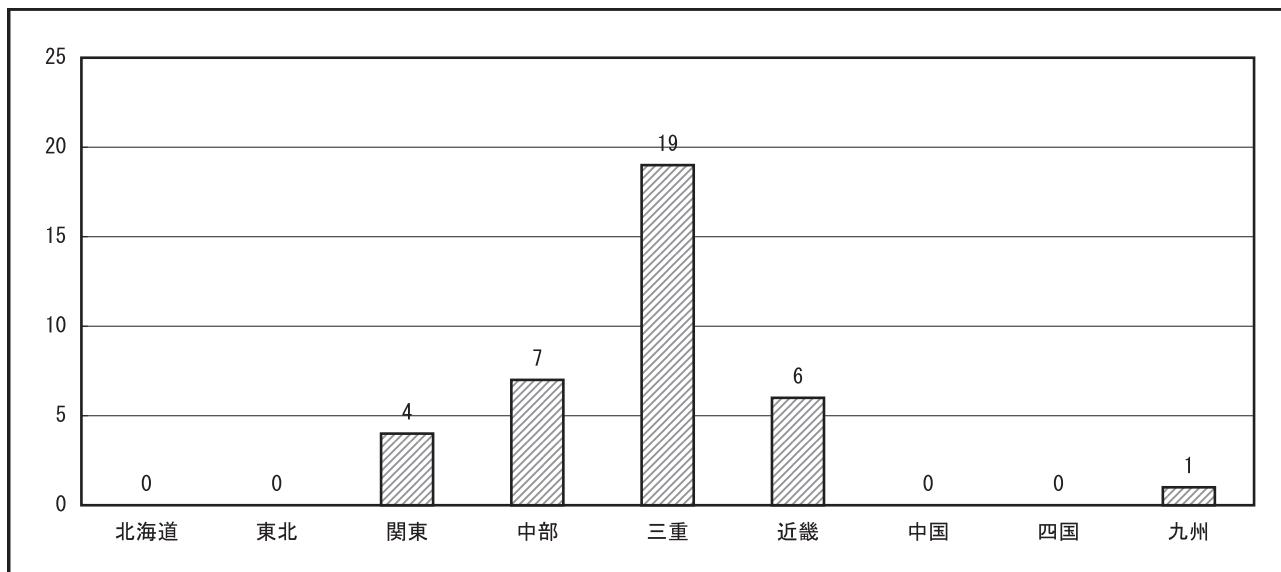
導入を開始した。平成 19 年度現在では当センター発注の全発掘調査に民間機関が参入することとなった。平成 19 年度現在、入札参加資格業者は 37 社となっている。入札参加資格業者の所在地については、第 1 図のとおり、三重県に営業所等の拠点を持つ民間機関が最も多くなっている現状である。

(2) 変容

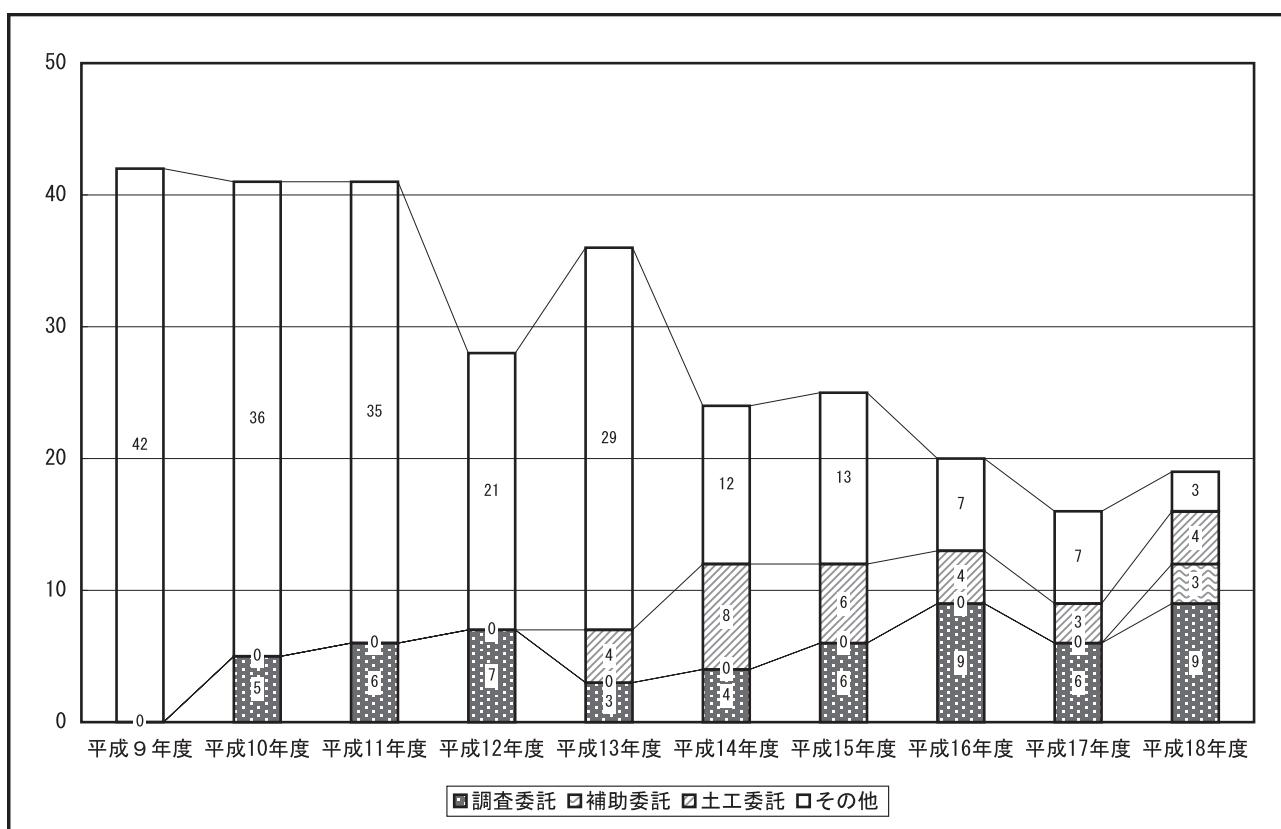
a 積算内容の変容 当初は掘削土量から算出した員数による発掘調査経費の算出を行っていた。それらの積算単価等の基準になるものは三重県が制定している設計単価である。現在の基準もそれらと同じである。ただ、平成 14 年度に、員数による算出から、より現実に近いと考えられる掘削土量による発掘調査経費の算出となった。

b 発注形態の変容 当初の形態は、「調査委託」つまり発掘調査にかかる全般、発掘調査（掘削・記録作業）、土工作業、土工管理、労務管理、安全管理を行うものだけであった。平成 13 年度からは「調査委託」「土工委託」、現在では、「調査委託」「補助委託」「土工委託」というように 3 つの発注形態を取っている。発注件数については第 2 図を参照願いたい。委託内容については「調査記録作業」と「発掘作業」に大別している。「調査記録作業」は遺構群の図化作業等の発掘調査にかかる記録を行うものであり、「発掘作業」は発掘調査のなかで調査記録に関わらないものを行うものである。「調査委託」は「調査記録作業」と「発掘作業」を行うもので、主体的に発掘調査が可能な人員を要求するものである。「補助委託」は「調査記録作業」と「発掘作業」を行うもので、発掘調査をサポートすることが可能な人員を要求するものである。「土工委託」は「発掘作業」だけを行うもので、発掘調査が可能な人員は要求しないものである。また、平成 16 年度からは、積算金額により民間機関の格付を行っている。三重県埋蔵文化財センター発掘調査業務発注標準（平成 18 年 4 月 10 日適用）により、三重県埋蔵文化財センター入札参加資格審査事項に基づく総合点数から、調査委託、土工委託、補助委託の 3 業務について第 1 表によろしく入札参加業者を選定している。「調査委託」については、設計金額 1,500 万円以上・総合点数 250 点以上を格付 A（9 社）に、設計金額 1,500 万円未満・総合点数 250 点未満を格付 B（13 社）としている。「補助委託」については、設計金額 1,000 万円以上・総合点数 200 点以上を格付 A（16 社）に、設計金額 1,000 万円未満・総合点数 200 点未満を格付 B（12 社）としている。「土工委託」は、設計金額 1,000 万円以上・総合点数 150 点以上を格付 A（19 社）に、設計金額 1,000 万円未満・総合点数 150 点未満を格付 B（18 社）としている。なお、平成 18 年度までは、発注のすべてを指名競争入札で行っていたが、平成 19 年度からは一般競争入札に移行した。委託に関わる当センターが求める人員については、共通仕様書により受託調査員として規定している。その内訳は、主任技師が発掘調査作業を担当する受託調査員の内、特に考古学的な精度管理をする者、調査員が発掘調査作業を担当する受託調査員の内、現場に常駐し、主に考古学的な発掘調査を担当する者、調査補助員が発掘調査を担当する受託職員の内、調査員を補佐し、現場に常駐し、主に考古学的な調査作業を担当する者、監理技師の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、現場に常駐し、主に土木的な作業を管理し、簡易な測量も行う者で、1 級又は 2 級の土木施工管理技士とすることとなっている。ただし、発掘調査に関わる人員である主任技師・調査員・調査補助員の資格認定は、三重県埋蔵文化財センターが行っている。認定の基準は以下のとおりである。主任技師及び調査員は、大学で考古学その他これに類する学科目を専門に修める課程を修了した者又はこれと同等以上の知識があると認められる者で、主任技師は通算 36 ヶ月以上、調査員は 24 ヶ月以上の主体的な発掘調査現場実務経験があり、発掘調査報告書又は考古学関係論文の執筆歴がある者とし、調査補助員は、発掘調査現場において考古学的な作業を 12 ヶ月以上補佐した経験がある者としている。

c 調査担当者の変容 民間機関の導入以前は、直営方式で発掘調査を行ってきた。そのような状況の中から、旧建設省外郭団体や県外郭団体に、発掘調査自体に専念できるということを前提に、労務・安全管理や測量業務を委託するようになった。このような体制は発掘調査を確実に行える担当者にとっては有効であったと感じる。但し、そうでなかつた場合は、あまり芳しくはない発掘調査現場の状況となるものといえよう。現在のように、民間機関



第1図 入札参加資格業者の所在地



第2図 民間機関への発注件数の推移（＊本調査件数のみ）

調査委託		
格付け	A	B
設計金額	1,500万円以上	1,500万円未満
格付け基準	総合点数250点以上	総合点数250点未満
補助委託		
格付け	A	B
設計金額	1,000万円以上	1,000万円未満
格付け基準	総合点数200点以上	総合点数200点未満

土工委託		
格付け	A	B
設計金額	1,000万円以上	1,000万円未満
格付け基準	総合点数150点以上	総合点数150点未満

第1表 各調査形態の格付け

のサポートを受けている発掘調査現場ばかりを経験すれば、調査担当者の「現場力」が低下する可能性の危惧は拭い去れない。残念ながらそのトレーニングとなるフィールドがなくなってきたのも現実であるが、そのような状況に甘んずることなく、自己の研鑽を続けていかなければならないといえる。その上、発掘調査に民間機関が参入し、発掘調査の内容に対してよりシビアに、またコストパフォーマンスを意識せざるをえない現状で、このような状況を理解できない調査担当者は今後淘汰されることになるのではないだろうか。これらのことは、組織の人材育成の中長期の戦略にもかかる問題であり、組織の存在意義にもかかってくる重要でかつ深刻な課題である。

3 民間機関導入と三重県埋蔵文化財センターの課題

(1) 組織として

民間機関の導入については、組織それぞれの力量を十分に熟慮の上で導入すべきと考える。とにかく民間機関の導入ありきでは、取り返しのつかない事態を生じかねないだろう。組織のもつ力量にみあった民間機関の導入をすべきと考える。民間機関を導入すればいいというのではなく、全国でみられる博物館あるいは資料館等に導入された指定管理者制度についても決して順調でないことをみてもあきらかように、十二分な議論を今後もすべきである。

(2) 今後の方向性

民間機関の導入の流れは止められないだろう。県だけに留まらず各市町に広がるであろう。文化庁で今年度行われている「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究協力者会議」の動向も気になるところである。当センターにおいても、組織のもつ力を再検証すべき時期と考える。原則、民間機関導入の方向の変更はないと考えるが、組織及び個々人の力量に合致した内容に順次変更することが必要といえる。

(3) よりよき方向への模索

民間機関の導入が悪というわけではない。費用対効果と説明責任を果たせば、国民・県民の理解を得ることはできるのではないだろうか。発掘調査及び埋蔵文化財保護行政を推進する上で何が必要で、何が必要でないかを考えればおのずと方向性ができるといえよう。なお、報告書作成については、現在でも民間機関の導入は行っていない。記録保存を前提として発掘調査を行っている以上、報告書の精度を保てるかが重要と考えるからである。なお、出土遺物の洗浄、出土遺物の実測といった部分については、遺跡の状況や報告書作成の進捗により民間への委託を行っているのも現実である。発掘調査全般にわたっていかに民間機関導入を行うべきか、よりよき方向をめざして当センターとしては模索を続けている。

【註】

- (1) 民間機関の定義としては、公的な外郭団体を除く、民間資本で設立されたあるいはそうと考えられる機関を指している。発掘会社のみならず調査部門を持たない機関も含んでいる。これまで、民間調査機関としている文献がみられるが、先にも述べたように、調査部門を持たない機関の参入がみられることから、民間機関と呼称することとする。
- (2) いわゆる3者体制と呼称されるものである。三重県埋蔵文化財センター『山城遺跡・北瀬古遺跡』1994年には、この体制の内容だけでなく、その当時の当センターの体制も詳細に述べられているので、参照願いたい。
- (3) 公社委託とも呼ばれているものである。平成元年度から県営圃場整備事業関連の発掘調査に導入した。詳細は(2)にある文献を参照願いたい。
- (4) 調査委託を三重県で最初に導入した。調査体制の内容については、三重県埋蔵文化財センター『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002年に詳細に述べられている。

三重県里遺跡発見の大型石棒について

—付・三重県内出土の大型石棒集成—

奥 義 次

1 はじめに

平成18年9月5日、伊勢市在住の中森巖氏が当センターに大型石棒を持参された。お話を聞くと、30数年ほど前のことらしいが、ご実家のある度会郡度会町大久保で、宮川が増水した折りに、段丘崖沿いの表土が洗われ、その中から亡父昱太郎氏が発見をされたという。その後、現地確認のため、ご実家を訪ね、巖氏の甥に当たる慰氏にも経緯をお聞きし、大型石棒発見地点とその周辺を踏査した。以下に同石棒の紹介をおこない、併せて県下の大型石棒についても出来るだけの集成と若干のまとめをしておきたい。なお、同石棒は今後の活用をはかるため、当センターへ寄贈をしていただいた。

2 大型石棒発見地点とその周辺

第1図で分かるように、宮川は度会町大久保付近でも大きく弧を描いて曲流する。大型石棒発見地点は北流してきた宮川が東へ流れを変えようとする、まさに攻撃点に当たる部分に位置する。この付近は中位段丘が断続的に展開し、多くは茶畠として利用されている。遺跡台帳によると、やや北側の窪地を中心に惣門遺跡が登録され、皇學館大学考古学研究会の分布調査で、縄文土器片・山茶碗片・土師器片・永楽通宝などが確認されている。このうち、縄文土器片は無文の小片らしく、まとまった資料とはいえないようである。大型石棒発見地点はすぐ西側で中位段



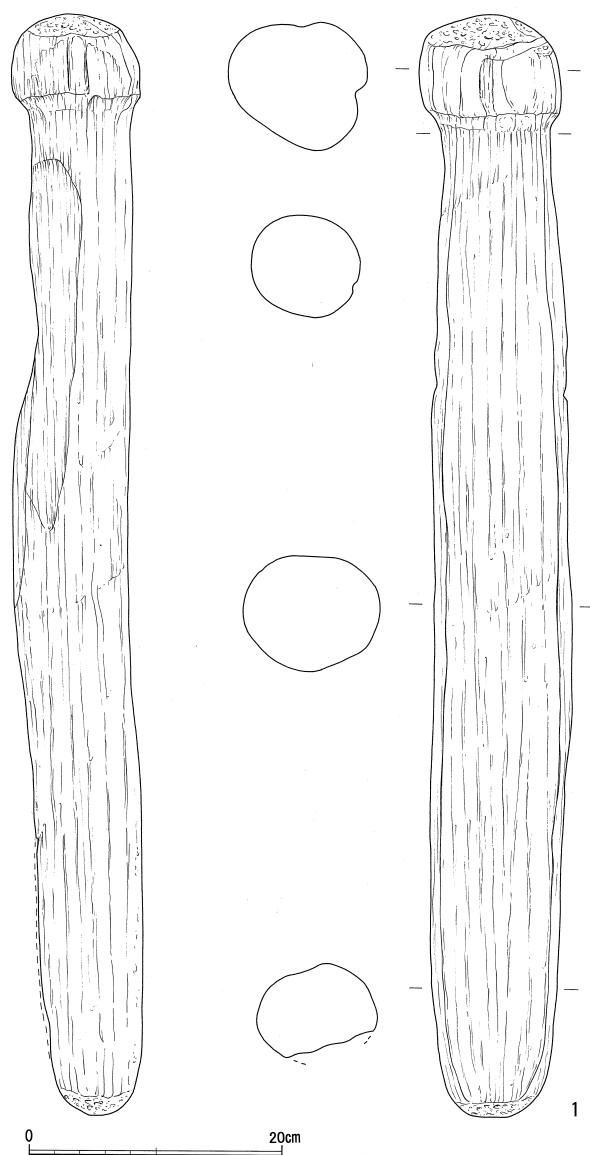
第1図 里遺跡位置図（網点が同遺跡推定範囲、▲印は大型石棒発見地点。1:5,000）



写真1 里遺跡・大型石棒発見地点近景（西南から）



写真2 馬乗り岩（南から）



第2図 里遺跡出土・大型石棒実測図（1：6）



写真3 里遺跡出土・大型石棒

丘に接続し、そこから宮川に沿って北東方向に一段低い段丘がのびる、付け根付近に相当する。南から東にかけては段丘崖をおいて眼下に宮川の河流を眺める。また、東側河岸には、写真2に見るような緑色片岩の巨大な露岩（通称馬乗り岩）が宮川に突出している。段丘と露岩の間は鞍部を形成し、そこには今も年中、わき水の湧出する泉がある。今回の分布調査では人家周辺も茶園ばかりで、見るべき裸地はほとんどなく、石棒に関連するような手がかりは得られなかった。ただ、中森慰氏の話によると、大型石棒発見地点の北々東数十mにある同氏宅東隣の茶畠では石鎚などが、以前にまとまって確認されていることから、北東に張り出す、この段丘をミクロな地形単位として捉え、該当の小字名から里遺跡と称することにした。したがって、遺跡範囲（推定を含む）は惣門遺跡の東方から南方にかけて、段丘上に隣接することになる。

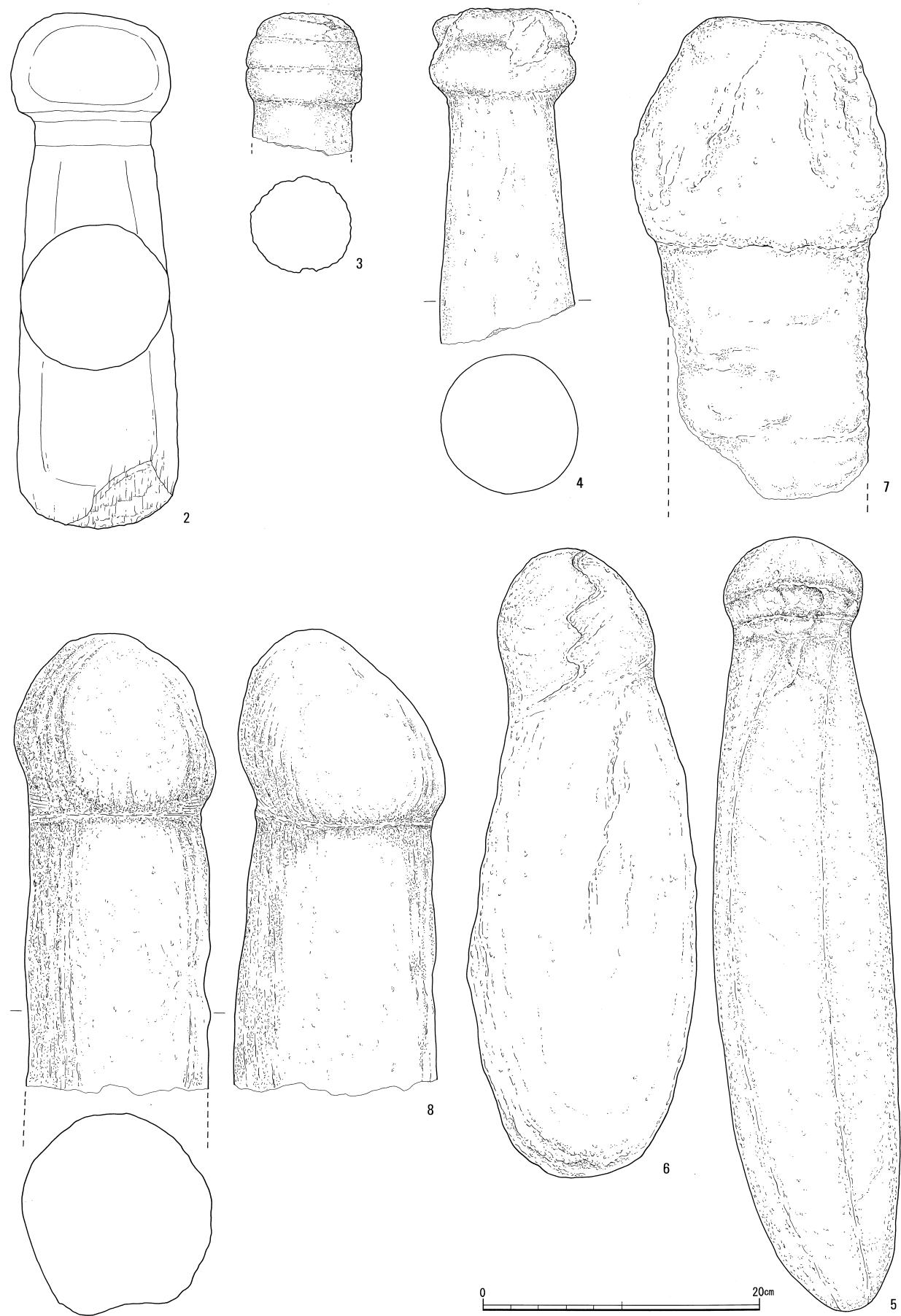
なお、大型石棒発見地点は平成16年9月末、台風21号の際にも記録的な豪雨により冠水し、表土が流出したため、置土をされ、現状に至っている（写真1は現状）。

3 大型石棒について（第2図）

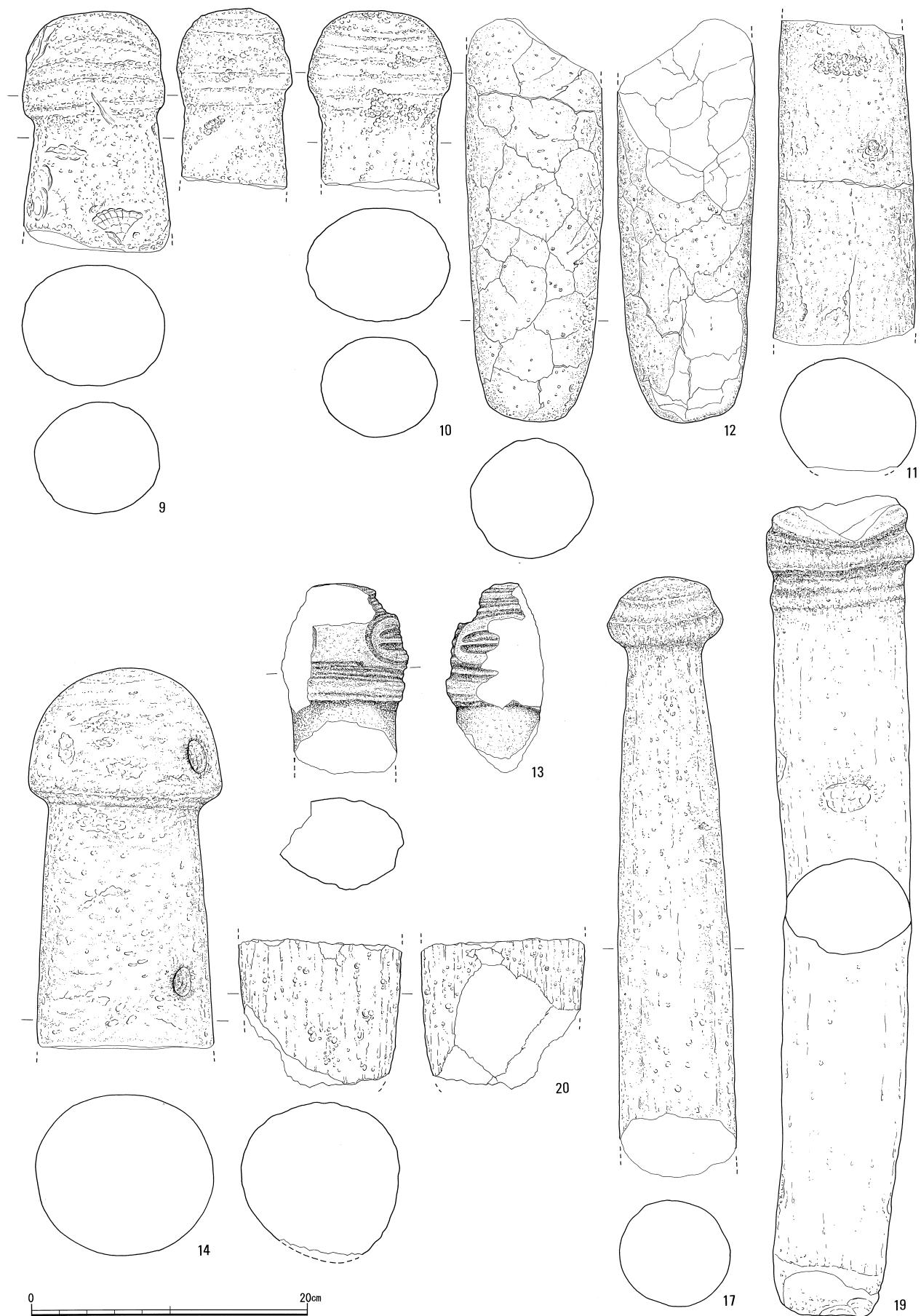
胴部側面が部分的に剥落しているものの、頭部（単頭）から基部にいたるまで、ほぼ完全形である。現在は胴部2箇所で折れているが、出土時点でも一箇所は折れていたようである。頸部に敲打痕を全周させて、まるで削り出すように頭部を作出している。基部と頭部上端面も敲打によって、丸味を帯びる。したがって、そのままでは自立しない。表面は絹糸光沢をもつ緑色片岩独特の地肌ないし質感を呈していることもあり、研磨の度合いについては分かりにくい。また、それだけに百パーセント完成品とは言い切れない。折損した断面には薄い紙を束ねたような線状構造が観察される。法量は長さ86.3cm、最大幅（頭部）11.0cm、頸部幅8.6cm、厚さ10.2cm、重さ14.84kg。筆者が知る限り、現存品ではおそらく三重県下最大のものであろう。石材はすでに触れたように、在地で産出する緻密な緑色片岩を利用している。前述の「馬乗り岩」は同岩主体の見事な露頭であるが、当石棒の石材と比べると、現状の露出面はややラフな印象を受ける。しかし、この付近の宮川沿いにはこのような露頭は随所で認められる。同岩は層（縞）状の片理性を利用すれば、大型石棒のような長大な素材を獲得するのには適しており、「馬乗り岩」を含めて、近くで比較的容易に調達できたものと思われ、このあたりに大型石棒製作地があつたとしても不思議ではない。⁽¹⁾

図番号	遺跡(発見地)名	所在地	長さ(現長)	頭部最大幅	頸部幅	身部最大幅	厚さ	重量	石材	推定期	文献番号
1	里	度会郡度会町大久保	86.3	11.00	8.60	10.90	10.20	(14.84)	緑色片岩		
2	川向	いなべ市北勢町瀬木	37.0	11.50	8.40	11.50	11.50	7.65	絹雲母片岩	中期末葉	1
3	薬師堂西	" " 阿下喜	(10.1)	8.40	7.00	(7.20)	7.00		青石		2
4	加毛神社境内	" " 垣内	56.0	10.00	8.50	12.80					3
5	"	" 垣内	(24.0)	10.50	7.60	(9.50)	10.00				3
6	八幡社神宝	" " 奥村	46.0	11.00	10.40	16.40					3
7	中山神社境内	" " 中山	34.0	18.50	15.10	(13.70)					3
8	六反	" " 麻生田	(30.5)	12.90	11.10	12.20	14.40		輝綠岩		4
	西与次右工門	員弁郡東員町筑紫									
	道山	四日市市南小松町道山	74.0	大8.8, 小6.2	大6.8, 小5.0	7.60	7.10	7.55	ハイアロ	晩期末葉？	
9	天白	松阪市嬉野釜生田町	(17.3)	(10.40)	9.00	(10.70)	(9.20)	(2.36)	石英質砂岩	後期中・後葉	5
10	"	" "	(12.8)	(10.25)	8.40	(8.40)	(8.10)	(1.51)	溶結凝灰岩	" "	5
11	"	" "	(13.3)			(10.10)	(8.00)	(3.11)	砂岩	" "	5
12	"	" "	(28.7)			(9.90)	(8.60)	(3.03)	砂岩	" "	5
13	城山	多気郡明和町岩内	(13.7)	(9.00)	(7.40)	(7.40)	6.60				6
14	マイラ	" 多気町土羽	(27.5)	14.00	10.90	(12.80)	(11.60)	(5.80)	凝灰岩		7
15	ソウダ	" 片野	(65.3)	12.00	9.30	12.30	11.30	12.20	溶結凝灰岩		8
16	"	" "	56.6	18.00	16.70	20.60	18.60	36.20	凝灰岩質砂岩		8
17	黒坂墓地	度会郡大紀町野原	(42.7)	8.30	5.20	8.20	7.60		結晶片岩		9
18	佐八藤波	伊勢市佐八町	(12.4)			(11.40)	9.00	(1.58)	凝灰岩	後期前葉から晩期	
19	贊	鳥羽市安楽島町	(58.3)	10.60	9.40	9.80	7.00	8.50	緑泥片岩	後期前葉	10
20	大差地山？	志摩市志摩町越賀	(10.6)			(11.70)	(10.80)	(1.76)	凝灰岩質砂岩	中期中葉？	11
21	清水北	伊賀市大野木	(14.2)			(11.10)	11.00	(2.23)	凝灰岩	中期末葉～後期後葉	12

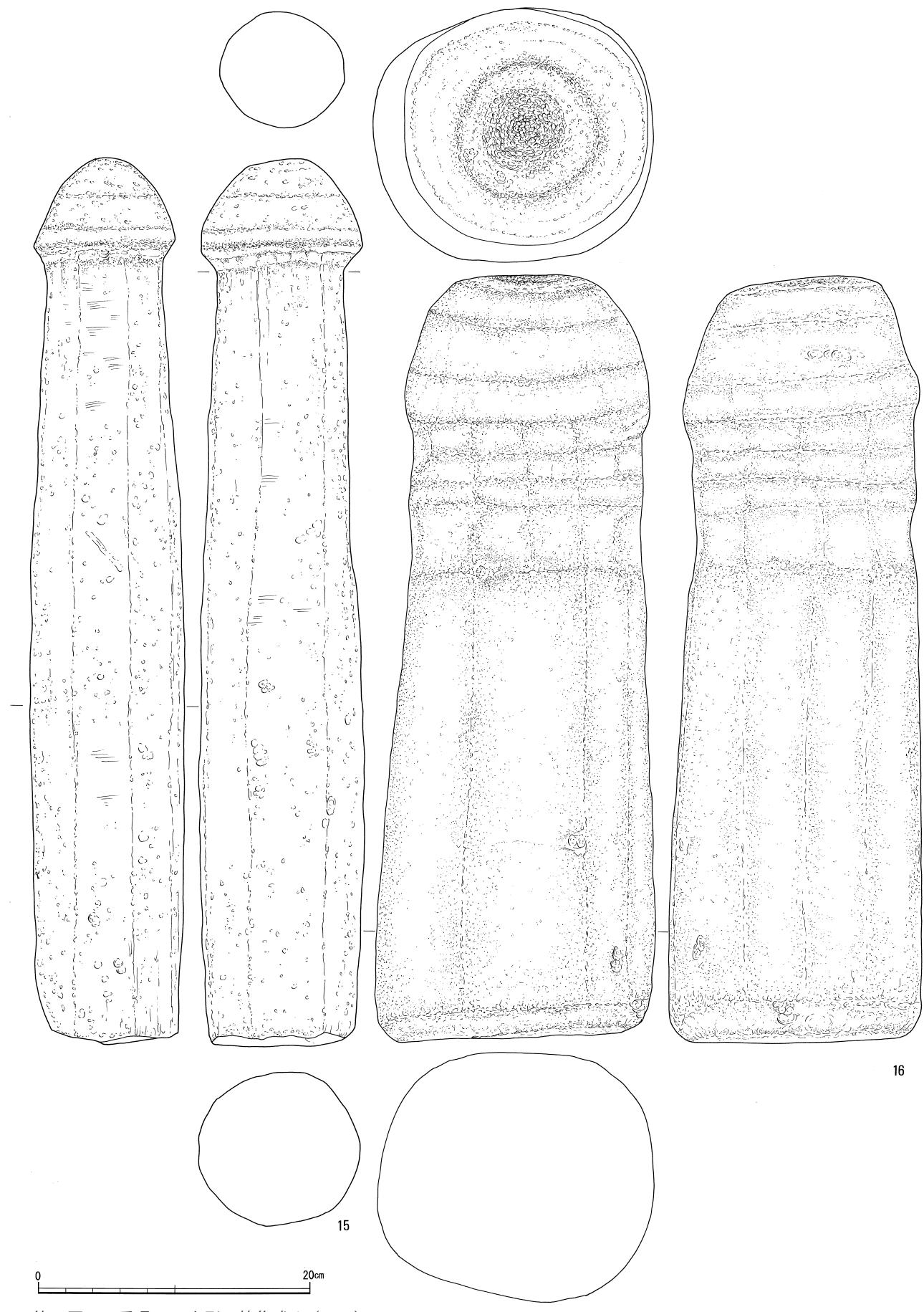
第1表 三重県内出土の大型石棒一覧表（今回集成分を中心として）



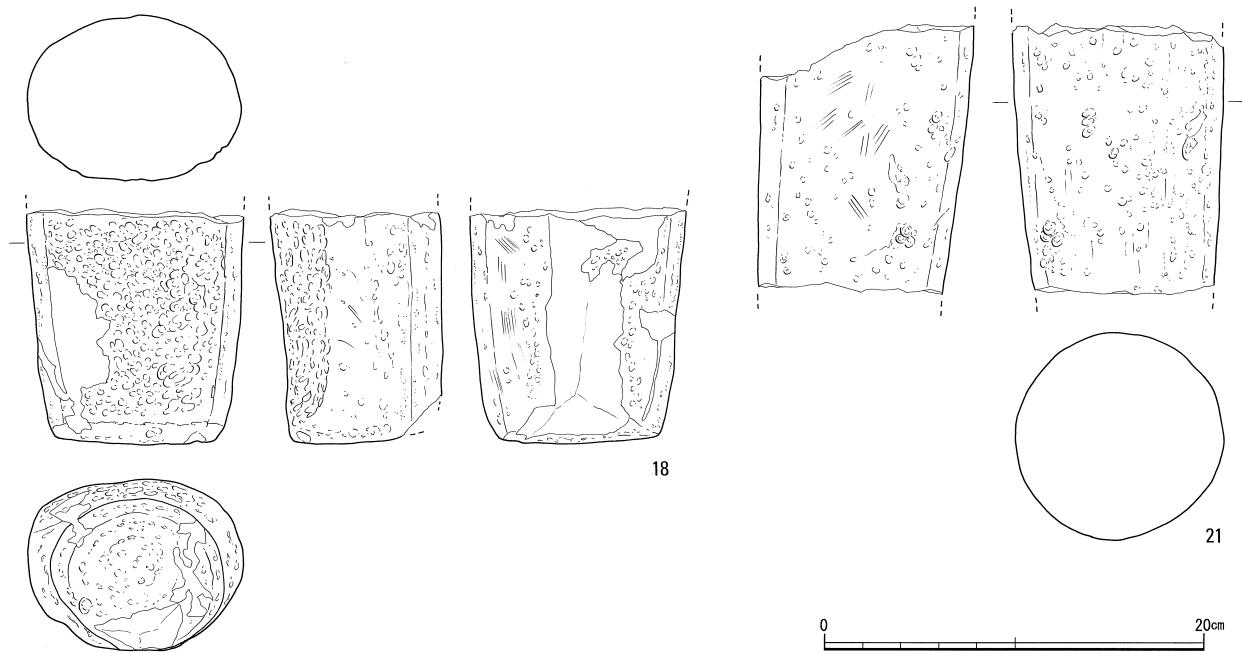
第3図 三重県下の大型石棒集成 1 (2は文献1による。3は文献2、4~7は文献3、8は文献4をもとに作成。1:4)



第4図 三重県下の大型石棒集成 2 (9～12は文献5、13は文献6、17は文献9、20は文献11による。19は文献10をもとに作成。1:4)



第5図 三重県下の大型石棒集成 3 (1:4)



第6図 三重県下の大型石棒集成 4 (1:4)

4 三重県内出土の大型石棒 (第1表・第3~6図)

今回、集成の対象にした大型石棒は頭部ないし胴部幅が10cm以上のものを基本とし、それに準ずる8cm以上のものも含めた。その結果、管見にふれたものは第1表の18遺跡23例（挿図にはこのうち、16遺跡21例を集録）を数える。ただし、県内には遺跡台帳に、単に「石棒出土」と記載されているだけで、今となっては行方不明のもの、大型の部類に相当するが、胴部の短い破片ゆえに見過ごされたり、製作途上の未製品と推定されるもの、「神宝」とされてなかなか、実見できないものなどが少なからず認められ、今回の集成ですべてを網羅し得た訳ではない。次に、大型石棒の出土状況・所属時期・形態的特徴・石材などについて、気の付いた点を簡潔に記しておきたい。

まず、出土状況について、発掘調査によるものは4遺跡（川向・天白・贊・清水北）の7例を数えるが、報告書に拠る限り、特に遺構との関連で取り上げるような事例は見当たらない。これら以外は開墾・耕作中の出土例（六反・城山・マイラ・佐八藤波遺跡など）とか、砂利採取工事中の出土例（西与次右エ門・道山）など不時発見によるものであるが、立地面では櫛田川流域のソウダ遺跡の2例などは、宮川流域の里遺跡と同様、いずれも被熱の痕跡を残さず、完形品ないしはそれに近い状態で、大きな河川に臨む段丘縁辺で出土している点が注意を惹く。

いわば、豊饒を祈るために聖なるモニュメントとして位置づけられていたものと考えられる。

所属時期については大差地山？例が出土土器の傾向から中期中葉と推定されているが、これについては出土地が⁽²⁾不確定であり、疑問が残る。従って、今のところ県内最古の例として確実なのは川向遺跡の中期末葉であろう。あと時期が確定しているものでは天白遺跡など後期中・後葉の例が若干見受けられる。他に注目されるのは、道山例⁽³⁾で、県内唯一の両頭石棒があげられる。共伴遺物が不明なので確実な時期は分からぬものの、南方の台地上には⁽⁴⁾晩期・五貫森式期の土器棺が出土した西野遺跡があり、両者の関連性が想定される。

形態的特徴では頭部不明のものを除くと、明確な無頭は見られず、大・小の頭部をもつ前述の両頭が1例（道山）あるほかは、单頭が圧倒的に多い。このうち城山例は鏃付で、原形は頭部両側に日の字の字画を橢円形にしたような浮き彫りを施している。このような頭部の作出から一見、御物石器に似ているが、そうではないようで、北陸・飛騨方面などのいわゆる鏃をもつ大型石棒の彫刻とも異なる、他に類例を見ないものである。マイラ例は頭・胴部

の側面数ヶ所に明瞭な小穴が観察され、何らかの石棒儀礼に伴って意図的に凹みを加えたものと推測される。類似の小穴は贅例の胴部にもあり、これらとは別に、ソウダ例の太く短い方は頭部平坦面の中央を窪ませている。

頭部の形状には細かく見れば、バリエーションが認められるが、概ね、笠状およびそれに近いものとやや丸みを帯びたものがあり、いずれにも1ないし2段以上の別がある。

また、折損・破碎例には表面が変色したり、剥落・亀裂が生じたりして、被熱の痕跡を残すものが数例（城山・清水北・天白の3例など）散見されることも見逃せない。

石材は大別すると、2つに分けられる。1つは伊勢湾西岸域では産出しない、凝灰岩系石材の搬入品であり、もう1つは、宮川流域など外帶の片岩系石材や内帶側の北勢では、員弁川支流青川源流部産出のハイアロクラスタイトなどの在地で調達可能なものに分かれる。後者には砂岩も含まれる。前者については、小型品とは異なって大型石棒ならではの特徴と言えるのではなかろうか。

以上、県内出土大型石棒の概略をみてきた。次は中・小型品の集成に向けて努力をしていきたい。

本稿を草するにあたり、岡田登・岡田雅幸・北川和美・北川ゆき・楠純子・小玉道明・斎藤理・酒井巳紀子・崎川由美子・田村陽一・中森巖・中森慰・南平秀生・野呂幸治・民上宗夫・山本達也各氏のお世話になりました。記して感謝を致します。

【註】

- (1) 長田友也 2006「三重県伊勢地域における縄文時代晚期の石棒類製作」『縄文時代』第17号 縄文時代研究会 では宮川流域における緑泥石片岩を素材とした、主に小型の石棒類製作に言及している。筆者は佐八藤波遺跡に加え、森添・池ノ谷遺跡も、特に晚期・突堤文期における同石材専用の石棒類製作遺跡と考えている。本遺跡の状況は今のところ、所属時期は不明であるが、大型石棒にも製作遺跡の可能性があることを示唆している。
- (2) 大下明 1995「近畿地方の石棒」『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる資料集』岐阜県宮川村教育委員会
- (3) 参考文献11の本文にも出土地の記載がないため気がかりになり、磯部郷土資料館・崎川由美子氏のご好意で実見をしたが、他の遺物にはよく見られる鈴木氏自身の出土地の注記は認められなかった。確かに同館所蔵の鈴木敏雄氏収集資料は柳谷を含む大差地山遺跡出土遺物がメインであるが、志摩各地や県下各地のものも含まれている。皇學館大學史料編纂所編 1991『鈴木敏雄氏遺稿・旧蔵史料目録』の整理番号3755には大差地山遺跡採集の石棒の写真があり、念のため、岡田登氏のご好意で実見をさせていただいたが、残念ながら、別物（これには鈴木氏自身の注記あり）であった。磯部郷土資料館所蔵の石棒には表面に黄褐色土の付着が認められる。この点は消極的ながら大差地山出土遺物に共通するが、それを決め手にはできず、現時点としては慎重に扱っておくべきであろう。
- (4) 鈴鹿市考古博物館・岡田雅幸氏のご好意により実見し、第1表の法量についてのデータも提供をしていただいた。
- (5) 葛山拓也 2003『西野遺跡・西野古墳群』四日市市遺跡調査会

【引用・参考文献（第1表の文献番号に同じ）】

- 1 春日井恒ほか 1993 『川向遺跡発掘調査報告』北勢町教育委員会
- 2 鈴木敏雄 1937 『三重県員弁郡阿下喜町考古誌考』(ガリ版刷)
- 3 鈴木敏雄 1945 『三重県員弁郡治田村考古誌考』(ガリ版刷)
- 4 江上辰男「山郷村大字麻生田に於ける遺跡及び遺物」『猪名部(総集編)』第2号 員弁高校郷土研究部
- 5 大下明 1995 「石製品」『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 6 皇學館大学考古学研究会編 1987 『明和町の遺跡』
- 7 奥義次 1992 「原始」『多気町史 通史』多気町
- 8 奥義次 2001 「勢和村の考古遺跡」『勢和村史 資料編2』勢和村
- 9 奥義次 1987 「原始社会」『大宮町史 歴史編』大宮町
- 10 松本茂一ほか 1987 『鳥羽 贊遺跡 第2次発掘調査報告』鳥羽市教育委員会
- 11 大下明ほか 1992 「磯部町立郷土資料館所蔵資料の調査」『紀伊半島の文化史的研究—考古学編一』清文堂出版
- 12 穂積裕昌・田村陽一 1994 「上野市清水北遺跡出土の縄文土器」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

弥生時代終末期における遺跡群の検討 —伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期社会分析の前提として—

石井智大

1 はじめに

弥生時代の社会構造ないしは社会集団に関する研究では、集落が分析対象とされることが多い。こうした弥生時代集落の分析においては、マクロ・ミクロ様々な手法がとられてきた。その中の一つとして、集落の分布状況を検討し、一定の地域内にまとまりを見せる遺跡群を、何らかの社会集団を反映した単位として把握するという分析方法がよく用いられる。この分析方法は、遺跡群内の各集落間の関係性を具体的に検証する作業をその後に必要とするという点でやや演繹的ではあるが、遺物・遺構など様々な研究に際しての分析単位となる前提的枠組みを作るという点において有効であろう。⁽¹⁾

弥生時代に限らず縄文時代や古墳時代においても、社会構造や社会集団について考えていく上でこうした遺跡群の分析が有効であることは、これまでの研究でも明らかである。それは弥生時代から古墳時代への過渡期となる弥生時代終末期においても例外ではない。しかし一方で、弥生時代終末期は、大規模な平野や盆地全体を包括するような広域にわたる社会的なまとまりの形成が重視されがちな時期である。次代の古墳時代社会の形成という動向をにらんだ時に、こうした広域にわたる社会的なまとまりの形成が非常に重要であることは確かであり、現在の研究ではこれらの広域にわたるまとまりの間の交流関係などに特に注目が集まっている。ただし、この広域にわたる社会的まとまりの内部構造に対する検討は進んでいるとは言い難いであろう。そこで本稿では、弥生時代終末期に濃尾平野を中心としたまとまりの形成を考えられる伊勢湾沿岸地域の中でも伊勢湾西岸地域を取り上げ、その内部構造を検討するための分析単位ともなりうる遺跡群の把握を試みたい。⁽²⁾⁽³⁾

2 遺跡群把握に関する研究と本稿の目的

遺跡群の把握とそれを通じた社会構造や社会集団に関する分析は、発掘調査件数の増加に伴って面的な遺跡の分布状況をある程度把握することが可能になり始めた頃から行われるようになってきた。遺跡群といつても検討対象とする地理的空間の広狭によって様々な規模のものが抽出可能であるが、弥生時代の研究では山地などによって地形的に周辺地域から分離される平野や盆地などが一つの分析単位として取り上げられることが多い。こうした広さの地理的空間を分析対象として抽出される遺跡群は、たとえば大阪平野の加美遺跡・亀井遺跡・久宝寺遺跡などのようにごく近接して存在するいくつかの遺跡の密集地帯というよりは、一定地域内に分布する多数の遺跡が形成する緩やかなまとまりとして捉えられる。

伊達宗泰による奈良盆地を対象とした分析は、こうした遺跡群研究の初期の事例としてあげられるが、その中ではすでに立地や水利条件など地理学的な要素を加味した遺跡群の把握が行われていることが注目される（伊達 1963）。その後、石野博信による奈良盆地における分析（石野 1973）や、寺沢薰による大阪湾沿岸地域や奈良盆地における分析（寺沢 1974・1979）、田中義昭による関東地方南部における分析（田中 1976）など、遺跡群の抽出とその検討によって、各地域の社会構造やその動態、地域内に存在する集団の歴史的性格などを明らかにしようとする試みが次々と行われることとなった。そして現在に至るまで、こうした遺跡群の把握は地域社会の構造や動態に関する分析を行う上での有効な手段の一つとして行われており、各地におけるケーススタディーが数多く蓄積されている（安

藤 1991、小沢 2002、高瀬 2006 など)。

これらの先行研究からは、遺跡群の把握という方法に二つの側面を見て取ることができる。一つは、限られた時間枠内における遺跡群の抽出である。そしてもう一つは、時系列に沿った遺跡群の変化の把握である。

前者では、ある特定時期の集団やその空間的領域を把握するとともに、その時期における社会構造を考えることが目的といえる。また、後者では、社会的動態を明らかにするとともに、時間的経過の中における社会構造の変化や複雑化の過程を考えることがその主たる目的となっているといえる。

この二つの側面は、弥生時代社会の構造を考えていく上では表裏一体として扱うべきであろうが、紙幅も限られている本稿ではあえて前者の側面を主軸に据えた検討を行いたい。社会の動態や構造変化ではなく、あくまで一定の時間枠内における社会構造の解明を念頭に置き、弥生時代終末期の伊勢湾西岸地域という限られた時空間において認識できる大きな遺跡群を把握することで、当該期の社会構造や物流などを検討する上での基礎的な分析単位となりうる社会集団の単位を抽出することを主たる目的とする。もちろん、こうした検討は、時間軸に沿った遺跡群の動態を明らかにするための一つの定点を定めるという意味も有している。

3 伊勢湾西岸地域における遺跡群の抽出

それでは、伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群を、遺跡の分布と河川・山地などの基礎的な地理的環境をもとに具体的に抽出していきたい。検討にあたっては、当該期の遺跡すべての分布状況を検討材料としているが⁽⁴⁾、それらの遺跡の中で発掘調査によって内容がある程度明らかになっているものは少数にすぎず、その他の多くの遺跡の内容は不明である点が問題である。しかしながら、発掘調査によって得られている情報を有効に活用することは必要である。そこで、遺跡群を把握するために作成した遺跡分布図（第1図）の中では、住居が検出されている遺跡をそれ以外の遺跡と区別できる形で示した。先に述べたように、本稿では作業を通じて把握した遺跡群の単位に対して何らかの社会集団の単位を投影することを視野に入れているため、人間の居住領域に重心を置きたいと考えるためである。以下、抽出された各遺跡群について個別に述べていく。

A：朝明川流域群 朝明川下流域を中心に員弁川下流域や海蔵川流域にまたがって遺跡が分布している。遺跡数はそれほど多くない。久留倍遺跡（1）・山奥遺跡（2）などが中心的存在としてあげられる。久留倍遺跡では住居の他に墓も検出されている。山奥遺跡は丘陵上に位置しており、後期後半～終末期前半にかけての住居が多数検出され、鉄製品も多く出土している。やや南に位置する東日野遺跡（3）なども地形的にはこの群に含まれる可能性が高いであろう。なお、員弁川上流域にも少数の遺跡が存在するが、この群に含まれると考えにくい。

B：鈴鹿川流域群 鈴鹿川流域に遺跡が点在しており、遺跡数は多いものの、ややまとまりには欠ける。ほぼ同時期に営まれたと考えられる八重垣神社遺跡（4）・宮ノ前遺跡・神戸中学校校庭遺跡（5）が集まっている地点をはじめ、上流部の地蔵僧遺跡（6）や勢武谷遺跡（7）、海岸部の岸岡山Ⅲ遺跡（8）など、いくつかの中心的存在と考えうる集落が散在していることは、この群がいくつかのさらに小さな単位の遺跡群によって構成されている可能性を示している。岸岡山Ⅲ遺跡は海岸部の独立丘陵の斜面地に存在し、多数の後期後半～終末期の住居が検出されている。勢武谷遺跡は丘陵頂部に立地し、複数の住居が検出されている。集落の周りには柵をめぐらせていましたと推定されており、弥生時代終末期のものと思われる鉄製品も出土している。また、やや南の中ノ川流域に存在する中瀬古南遺跡（9）なども、地形的にみれば鈴鹿川流域群に含まれる可能性が高いであろう。

C：安濃川流域群 安濃川中・下流域から志登茂川・岩田川にかけて多くの遺跡が分布する地域である。道路建設などのために発掘調査が多く行われているということもあるが、低地と丘陵地が複雑に入り組んだ地形をなし、居住に適した場所や可耕地も多いと考えられることから、実際に遺跡数も他の遺跡群より多いものと思われる。祭祀



第1図 伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期遺跡の分布と遺跡群

に関わる遺構が検出され、銅鏡も多く出土している六大A遺跡（10）や、その周囲に展開している中鳶遺跡・橋垣内遺跡などがこの群の中心的存在とみることができるが、南部にも高松C遺跡（11）のように低い丘陵上に住居が多数検出されている遺跡があり、中心的な集落となっていた可能性がある。この群も鈴鹿川流域群と同様により小さな遺跡群に細分可能かもしれない。また、前田遺跡など、墳墓のみが検出されている遺跡もある。

D：雲出川流域群 雲出川下流域及び雲出川の支流の中村川流域に多くの遺跡が分布しており、遺跡の分布密度がかなり高い地域といえる。特に雲出川下流域には片部遺跡（12）・西肥留遺跡（13）・雲出島貫遺跡（14）など目立つ遺跡が集中している。片部遺跡では、弥生時代終末期に属する可能性のある堰が検出されている。西肥留遺跡では多数の住居が検出され、鉄鏡・銅鏡など多くの金属製品が出土したほか、弥生時代終末期に属する可能性の高い銅滓も出土しており、金属器加工を行っていた可能性も指摘される。これらの遺跡群よりやや西の中村川流域では、丘陵上に小谷赤坂・清水谷遺跡（15）のように環濠をめぐらせる遺跡が営まれている。この付近の丘陵部では、東峠遺跡（16）・西野遺跡など、墳墓のみが検出されている遺跡もある。また、この群で注目されるのは、貝蔵遺跡や赤部遺跡（17）、雲出島貫遺跡など雲出川下流域の遺跡で、北陸地方や東海地方東部など他地域との関係性を示す土器が多く出土していることである。

E：阪内川流域群 阪内川・三渡川などの流域に遺跡が分布する。散布地などが多く、内容が判明している遺跡は少ない。阿形遺跡（18）では環濠と思われる溝が検出されている。この溝は弥生時代終末期に埋没したと考えられるが、それまでは環濠として機能していたものと思われる。弥生時代終末期の居住域は未確認であるが、中心的な集落であった可能性が高い。堂ノ後遺跡（19）でも複数の住居が検出されている。また、瀬干遺跡のように、墳墓のみが検出されている遺跡もある。

F：櫛田川流域群 櫛田川中・下流域や祓川流域の河岸段丘上を中心に遺跡が分布する。遺跡の分布はやや散漫で、まとまりに欠ける。北側については阪内川流域群との明瞭な境界を決し難い。阪内川流域群との境界付近には草山遺跡（20）が存在しており、多数の弥生時代終末期に属する堅穴住居が検出されているほか、小銅鐸も出土しているなど、この遺跡群の中心的な存在といえる。祓川の東に位置する北野遺跡（21）もこの遺跡群の中心的な集落であると考えられ、後期後半から終末期にかけての多数の住居が検出されている。墳墓もいくつか見つかっており、寺垣内遺跡や織糸遺跡（22）では方形周溝墓群が検出されている。織糸遺跡では埋葬施設から副葬品として玉類が出土している。

G：宮川流域群 宮川流域から外城田川流域に展開する遺跡群である。遺跡数はそれほど多くなく、分布もやや散漫である。野垣内遺跡（23）では多数の住居の他に墳墓も検出されており、この遺跡群の中心的存在をなしていると思われる。その付近の中楽山遺跡や小社遺跡などでも住居や墳墓が検出されている。一方で、外城田川上流域には勝田遺跡（24）をはじめいくつかの集落が見つかっており、また宮川の東側に存在する隱岡遺跡（25）でも多くの住居が検出されているなど、核となるような集落・集落群がいくつか存在している。全体の遺跡数は多くなくとも、やはり内部にいくつかの小遺跡群を内包しているようである。

H：志摩半島北東部群 志摩半島の北東部にいくつかの遺跡が分布しており、これらを一つの遺跡群として把握した。この群の遺跡数はごく少数で分布も散漫であり、また立地的に海を意識していると思われる遺跡が目立つなど、他の遺跡群と同様の性格を持つものとして扱うことは難しいかもしれない。海岸段丘上に立地する白浜遺跡（26）からは住居が検出されているが、銅鏡が多数出土している点などからみてこの群の中心的存在をなすものと考えられる。島にも遺跡が見られ、答志島にはおばたけ遺跡（27）がある。この遺跡では古墳時代前期の住居が検出されており、弥生時代終末期にも人が居住していた可能性は高い。

以上のように、8単位の遺跡群が抽出できた。ただし、開発などによって発掘調査が進んでいる地域とそうでな

い地域とがあるなど、基礎となる情報にやや偏りが生じていることは否めない。遺跡の分布が散在的である櫛田川流域群や志摩半島北東部群などでは当該地域での開発行為も少なく、そうした情報の偏りによる影響を考慮しておかねばならないだろう。しかしながら、遺物散布地など発掘調査を経ていなくても遺物が判明している遺跡については極力情報を取り込んでいるため、遺跡の分布傾向 자체の把握には大枠として問題ないものと考える。

これらの抽出された遺跡群について概観すると、まずその空間的領域は、各遺跡群ともほぼ径10km内外の広さを持つ。遺跡群名として河川名を用いているように、遺跡は基本的には河川に沿ってまとまった分布状況を示しているが、一つの遺跡群内においても単一の河川ではなく複数の河川ないしは支流にまたがって分布している。どちらかといえば、河川を基軸としているよりは、大規模河川を中心として小平野が展開しているため、こうした地形的影響によって河川に沿った分布状況を示しているとみた方がよいであろう。

遺跡群内部に注目すると、いずれの遺跡群にも共通する状況として、核となるような集落もしくは遺跡の集中部が存在する点が注目される。遺跡群内に核となりうる集落や遺跡集中部が複数存在する例もいくつかの遺跡群で認められる。核では金属器や他地域との関係を持つ土器の出土が目立ち、物流や特殊な技術・原料を要する物品の生産に際して要となるような性格を持っていたことを示している。また、丘陵上に営まれる集落が存在することや、墳墓が集落とは別に独立的に存在している場合があることなど多くの遺跡群で確認できる。墳墓は居住域に接して営まれている例も多く、こうした墓域と居住域の関係における違いも注目されよう。

4 遺跡群の性格に関する予察

伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群を抽出し、それらについて概観してきた。これらの遺跡群の単位が当該期の何らかの社会集団の単位を反映しているのか、そして反映しているならば、どのような社会集団として捉えられるのかは、これから各種の検討を通じて考察していくべきものである。しかしながら、今後この遺跡群単位を分析単位として扱っていく上では、こうした点について予めある程度の見通しを持っておくことも必要であろう。

本稿の検討の中から見出されるこうした見通しを得るためにキーワードとしては、各遺跡群における、空間的領域の広さ、核の存在、内部におけるより小規模な遺跡群の存在、そして複数河川にまたがる遺跡の分布状況という4つの点がとりあえずあげられよう。この少ない手がかりのみから遺跡群の社会集団としての性格を考えていくことは困難である。そこで、集落や遺跡群などの検討によって弥生時代の社会構造について検討を行っているいくつかの先行研究の成果を参考として、本稿で抽出した遺跡群について若干の予察を行ってみたい。

各研究において想定されている社会集団は、対象とする地理的範囲や遺跡群の規模、そして分析の視点などによって様々であるが、弥生時代研究においては農業共同体という集団組織の存在が常に意識されており、その実体としての把握を念頭に置きつつ遺跡群の把握が行われてきた面があるといえよう。このことが、水系や水利条件を強く意識した遺跡群の把握へつながっている。たとえば、寺沢薰は、水系を基軸とした集団のまとまりを重視し、その基礎的な単位をなす小遺跡群の領域を「基礎地域」ないし「小共同体」として把握している。この基礎地域は径5kmほどの空間的領域を持ち、その多くには母集団と呼ばれる中心的な遺跡が存在するとされる（寺沢 1979・2000）。また、都出比呂志は「農業共同体的結合」が中小河川流域程度の単位で形成されているとしている（都出 1984）。

単純に空間的領域の広さで比較すると、本稿で抽出した遺跡群は複数河川流域に広がって分布し、基礎地域や農業共同体的結合とされるような集団より広い領域を持つ。どちらかといえば、内部に存在するより小規模な遺跡群こそが基礎地域や農業共同体的結合として捉えられる集団に対応するものと想定され、本稿で抽出された遺跡群自体はそれより上位のまとまりとして捉えられるのではなかろうか。

弥生時代の社会構造・集団研究では、分析対象となる資料が豊富な中期に焦点が当てられることが多く、そのため水系を越えて広がるような広い領域を持つ社会集団に対する概念にはやや乏しい。酒井龍一によって畿内大社会論も展開されているが（酒井 1984）、その実体は、拠点集落を中心とした等質的なまとまりによる日常活動空間が、生産・消費を媒介としてつながり合った連続的な集合体として捉えられており、弥生時代終末期の伊勢湾西岸地域の遺跡群をこうした集合体として見ることは難しいであろう。

他方で、古墳時代社会への展開という視角においては、広域にわたる領域を持つ集団についての概念化も図られている。寺沢薫は基礎地域より上位のレベルでの社会集団の形成についても考察を行い、複数の基礎地域の結合からなる「大地域」ないし「大共同体」というまとまりの存在を示している（寺沢 1979・2000）。寺沢はこの大地域を水利を基軸としたまとまりと考えるが、一方でこのまとまりを「クニ」と呼び、その内部構造や存立基盤に政治的要素を強く見出している。同様に、都出比呂志も、農業共同体の系列化によってより大きなまとまりである「政治的結合体」が形成されたとみており、その内部には首長と共同体員との間の階級的関係などより高度な社会構造の形成を想定する（都出 1970）。

これらで提示されている社会集団は、示されている規模や遺跡群としての構造などから見る限り、本稿で抽出した遺跡群の様相と近いように思われる。ただし、これらの社会集団概念は背景に歴史的な集団概念を多大に含むものであり、詳細な検討を経ていない現在、安易に本稿の遺跡群をこうした概念と照応させることはできない。しかしながら、これまでに考えられてきた社会集団のあり方においては、実際的な農耕における協働範囲を超えるような規模での集団の結合に、より政治的・経済的な関係性が強く働いていることが想定されているということは言えよう。本稿で抽出した遺跡群で核となる集落が物流や特殊技術・原料を要する物品の生産に際して要となるような性格を持っていたと考えられることからは、これらの集落が遺跡群中の政治的・経済的な中心としての機能を果たしていたことが窺われる。ここでは、こうした点も踏まえつつ、伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期の遺跡群に対して、政治的・経済的な関係性を基軸としてまとまった社会集団としてのあり方を想定するにとどめたい。

また、その集団間の関係については、松木武彦が岡山平野において遺跡の分布や地形条件をもとに設定した「地域集団」のあり方が参考となろう（松木 1993）。松木の示した地域集団は、農業における生産活動を基盤としつつも各種生産活動における領域を含むものとして把握されており、⁽⁵⁾その領域はほぼ径5km圏内とされている。古墳時代初頭以降には岡山平野に存在する4つの地域集団が政治的な意志を共有する一体的関係にあったと推測されているが、重要であるのは各地域集団の政治的・経済的な独立度が相対的に低かったと想定している点である。伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期遺跡群でも、雲出川流域群・阪内川流域群・櫛田川流域群などは遺跡群としてのまとまりは見せるものの、その群間の境界は遺跡分布状況からみるとやや曖昧である。集団としての規模に違いはあるが、松木の示した地域集団同様に、伊勢湾西岸地域の遺跡群も政治的・経済的要素を基軸として結合しつつも相対的な独立性は低く、集団間に明確な領域境界が設定されないようなものであった可能性を考えておきたい。

5 小結—今後の課題—

本稿で抽出した弥生時代終末期の遺跡群は、繰り返し述べてきたように、各種分析のための前提となる分析単位とするべく設定したものである。したがって、遺跡群の抽出自体が何らかの結論となるものではない。演繹的方法論による研究のための前提の整備にあたるに過ぎず、今後の各種検討においてこの枠組みを参照しつつ議論を行うことによって、初めて一定の成果が示せるといえよう。

ただし、この遺跡群は全くの恣意的な遺跡の集合体に過ぎないわけではなく、前章で考えたように一定の空間的領域を持つ社会集団の単位を反映しているものと想定される。そうなると、今後検討していくべき課題としては、

まず各々の遺跡群の内部構造の検討があげられよう。弥生時代中期の研究では、一定の地域内に分布する遺跡群間に有機的な関連性を想定し、各種機能を内包する集合体として一体となって地域社会を構成していたという見方が出されており、それが拠点集落論や高地性集落機能論などとも相まって社会構造の分析へと発展している。伊勢湾西岸地域の弥生時代中期研究でもそうした見方が示されている（穂積 2005、石井 2006）。また近年では、こうした見方に各遺跡の詳細な立地条件等を加味した研究も進められてきている。弥生時代終末期の遺跡群についても、これらのような視点をもってその内部構造に関する検討を行わなければならない。それが、抽出した遺跡群の社会集団としての性格を具体化させていくための第一歩となろう。

また、各遺跡群間の差異や関係性に関する検討も大きな課題である。その分析対象となるのは遺物や遺構である。これまでに、土器などの遺物に基づいて集団間の関係を分析する試みは広く行われてきた。近年では各遺跡群内部で検出された遺構に基づく詳細な議論も展開されている（高瀬 2006）。こうした遺物・遺構の検討から各遺跡群間の差異や関係性を検証していく議論がなされることにより、前提として設定した遺跡群を何らかの社会集団として考えることの妥当性がより明確に保証されることとなろう。そして同時に、これが伊勢湾沿岸地域に形成された広域に及ぶまとまりの実態に接近するための大きな手がかりとなるものと思われる。

そして、当然のことながら時間軸に沿った検討も必要である。これまでのこうした遺跡群把握の研究では、時間軸に沿った遺跡群の動態を併せて検討していることが多い。これは社会の動態を知る上で有効な手段となっており、先にも述べたように遺跡群把握を行う大きな目的のうちの一つである。本稿では限られた時間枠内における遺跡群把握のみを行ったが、本来は時間軸に沿った動態についても検討すべきであろう。こうした検討は、弥生時代終末期とその前後の時期との間だけではなく、弥生時代終末期の中でも行っていく必要がある。これまでにも伊勢湾沿岸地域の弥生時代終末期における遺跡の動態については赤塚次郎が言及しているが、そこでは伊勢湾西岸地域での廻間Ⅱ式期の集落の衰退が社会の動態を考える上で重視されている（赤塚 1996）。ただし、例示されている遺跡は、本稿で抽出した遺跡群中でも核の一つとなっている遺跡ではあるものの、ごく少数の単体の遺跡のみである。遺跡群の動態として見た場合にはどのような傾向が見られるのかという点については検証していく必要があろう。

社会の動態という面から見れば、弥生時代終末期という時期は、その後の古墳時代へとどのように社会が変化していくのかを考える上で重要である。弥生時代の遺跡群の検討も、その後の古墳の築造状況を踏まえて行われている例も多い（伊達 1963、都出 1974、松木 1993 など）。伊勢湾西岸地域でも、こうした視点での検討は必要である。

以上のように、本稿をもとに検討していくべき課題は山積している。これらの課題について検討することによって、伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期における社会構造とその変動を少しづつでも明らかにしていくことができるであろう。具体的な検討作業については、また別稿に期したい。

【註】

- (1) 考古学における地域研究の一環として何らかの分析を行おうとするとき、その立論の基礎・前提となるべき分析単位の設定は重要である（石黒 1988、高瀬 2005）。本稿で抽出を試みる遺跡群単位も、実質的には遺跡の平面的分布のまとまりに過ぎないが、今後の伊勢湾西岸地域における弥生時代終末期に関する分析において基礎・前提となる分析単位としては有効なものであると考える。
- (2) 近畿地方の庄内式期に併行する時期を指すものとする。本稿で対象とする伊勢湾西岸地域では、一部布留式期初頭まで含んでいる可能性が高いものの、廻間Ⅰ～Ⅱ式期（赤塚 1990）がほぼその時期に該当するものと考える。伊勢湾西岸地域で用いられることがある島貫編年（川崎 2001）では、島貫Ⅱ（古）～島貫Ⅲ（古）期を該当させる。この時期を弥生時代終末期と捉える立場と古墳時代初頭と捉える立場とが長らく並立しているが、筆者は前者の立場を取っている。
- (3) 本稿で対象とする伊勢湾西岸地域とは、揖斐川・長良川・木曽川の木曽三川から志摩半島までの間の伊勢湾に面した地域を指す。木曽三川は川幅も広く、下流域の川沿いでは洪水によって安定した居住が望めない土地も多いなど、地理的区分のみならず集団の空間的領域を区切る上でも大きな境界をなしていると考えられる。

- (4) 出出土器が資料として公表されているなど、現時点で時期が確認できる遺跡を中心として集成した。なお、各遺跡個別の報告書等の参考文献については、紙幅の関係上から割愛させていただいた。ご容赦願いたい。
- (5) 各地域集団が地理的環境などによってやや異なった性格を持つことも想定されており、本稿における志摩半島北東部群などの性格を考える上でも参考となろう。

【参考文献】

- 赤塚次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第10集 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1996 「前方後方墳の定着－東海系文化の波及と葛藤－」『考古学研究』第43巻第2号 考古学研究会
- 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に－」『調査研究集録』第8冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井智大 2006 「居住域と墓域の空間的関係とその変動」『墓と集落－その見えない関係－』中部弥生時代研究会第12回例会発表要旨集 中部弥生時代研究会
- 石黒立人 1988 「弥生時代の美濃地方とその特質」『マージナル』No.8 愛知考古学談話会
- 石野博信 1973 「大和の弥生時代」『考古学論叢』第2冊 檜原考古学研究所
- 小沢佳徳 2002 「弥生時代における地域集団の形成」『究班II』 埋蔵文化財研究会
- 川崎志乃 2001 「古墳時代前期の雲出島貴遺跡」『嶋抜III』三重県埋蔵文化財調査報告218 三重県埋蔵文化財センター
- 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトメントシステム」『文化財學報』第3集 奈良大学文学部文化財学科
- 高瀬克範 2005 「仙台平野とその周辺における占地特性－縄文時代晩期と弥生時代の包蔵地群分析から－」『古代文化』第57巻第5号 財團法人古代學協會
- 高瀬克範 2006 「東京湾東岸における弥生後期から古墳前期の集落構成－『臨海型大形集落』の性質をめぐって－」『古代文化』第58巻第2号 財團法人古代學協會
- 伊達宗泰 1963 「遺跡分布よりみた古代地域の考察－奈良盆地の場合－」『近畿古文化論叢』 吉川弘文館
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第22巻第3号 考古学研究会
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権－階級形成の日本の特質－」『講座日本史』1古代国家 東京大学出版会
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史』1原始・古代1 東京大学出版会
- 寺沢薰 1974 「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上）・（下）」『古代学研究』第72・73号 古代學研究會
- 寺沢薰 1979 「大和弥生社会の展開とその特質－初期ヤマト政權成立史の再検討－」『檜原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館
- 寺沢薰 2000 『王權誕生』日本の歴史02 講談社
- 穂積裕昌 2005 「菟上遺跡中期弥生集落の評価」『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告227-7 三重県埋蔵文化財センター
- 松木武彦 1993 「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団－鹿田集落の地域史的位置づけ－」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財センター
- 若林邦彦 2006 「集落からみた「畿内」社会－「基礎集団」をキーワードに－」『シンポジウム記録5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』 考古学研究会
- 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域－旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて－」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館

古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群

川 崎 志 乃

1 はじめに

伊勢湾西岸部のほぼ中心部を流れる雲出川流域は、伊勢湾西岸地域においては前期古墳の数量・規模が突出する地域である。前方後方墳が集中して存在する点では日本列島においても希有な地域であるが、その内容は不鮮明である。しかし、集落遺跡である雲出島貫遺跡において各地域の土器が搬入されていることが確認され、当時の土器交流が活発であったことが知られるようになった（川崎 2001）。また、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての関東地方の出現期古墳に東海地方西部系土器が含まれていることが知られてきたが、伊勢平野の雲出川下流域に出自を求める土器群が存在し、その背後には近畿地方からの影響がみられることが明らかになった（川崎 2006）。本稿では、近年、雲出川下流域における集落遺跡の資料数が増加してきたことから、古墳出現期の集落遺跡の動態を検討したい。

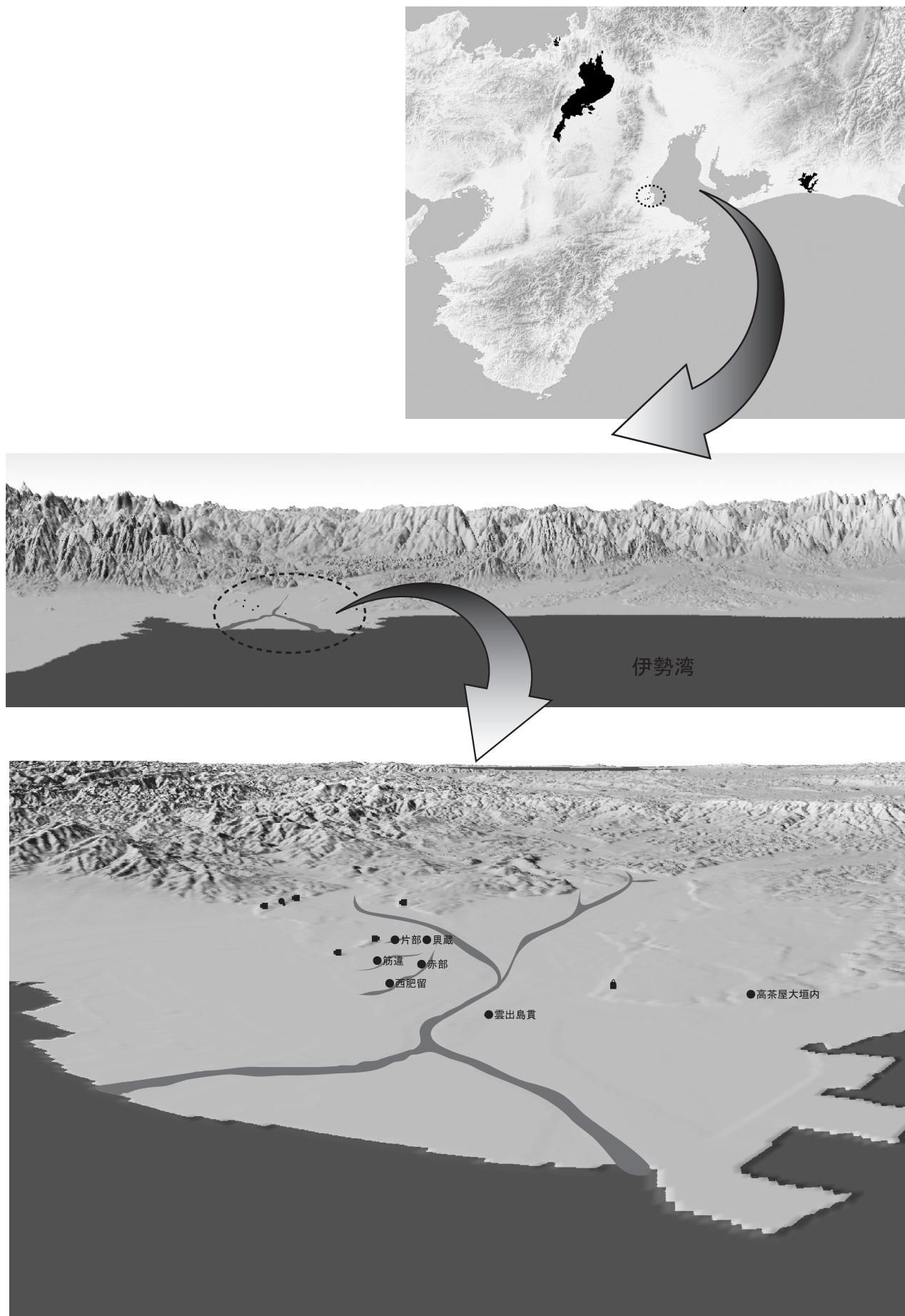
2 各遺跡の様相と画期

雲出川右岸の西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡は同じ旧河道の自然堤防上に立地する遺跡であり、筋違遺跡も一連の旧河道から分岐した旧河道の自然堤防上に位置する。⁽¹⁾ 西肥留遺跡で旧河道岸に護岸の土堤と柵が確認されていることや筋違遺跡で古墳時代前期の水田層であるIV層上部a-3層に伴う旧河道岸の土堤に袋状鉄斧が埋納されていた点から、旧河道を意識した人間活動が行われていることが分かる。つまり、当該時期に河道として機能しており、旧河道がこれらの遺跡間を往来する導線となっていた可能性が高い。

旧河道の自然堤防から後背低地までを横断する形で調査が行われた西肥留遺跡では、自然堤防を利用した微高地上に居住域を中心とする集落が展開する。微高地の規模は大きく、III-1期（山中Ⅱ式）の段階で約130×170m、III-4期（島貫Ⅲ期新相）段階で130×310mである。調査区は自然堤防の南東部に相当する地点と考えられ、その中でも金属加工の痕跡は南東部に集中する。集落構造の変化の点では、島貫Ⅲ期古相に居住域と生産域（金属加工）の間が溝で区画されていたのに対し、島貫Ⅲ期新相には居住域と墓域が溝で区画されるようになる。集落の様相や金属加工の痕跡は、土器の変化に連動した特徴的な変化は認められない。片部・貝蔵遺跡のうち貝蔵遺跡は西肥留遺跡・赤部遺跡と同じ旧河道の自然堤防上に位置しており、片部遺跡は後背低地に位置する。貝蔵遺跡では、縄文時代晩期後半から奈良時代の遺構が同一遺構面で検出されていることから同一旧河道の自然堤防上とはいえども安定した地点といえるが、網目状に水路が巡っていることから確保できる面積は極めて狭い。片部遺跡で確認された大溝は堰が多く確認されている点から船が往来することは困難と思われ、両岸に水田が展開する状況と合わせて第一義的には農業用の灌漑水路と捉えておく。筋違遺跡は居住域の展開する微高地の面積が狭い。居住域と水田域の間には灌漑水路が掘削されており、旧河道と灌漑水路間は水田域が広がっている。

雲出川左岸の雲出島貫遺跡では居住域と墓域が2カ所ずつ確認されており、墓域は階層が異なることが明らかになっている。また、集落と水田域を区画する溝は島貫Ⅱ期新相には埋没するが、その後も集落は継続する。

これらの集落は、時期的には山中Ⅱ式および島貫Ⅰ期の土器が出土することが多く、集落形成が当該時期に遡る傾向が窺われる。消長については、雲出島貫遺跡では古墳時代前期後半の島貫Ⅳ期以降前期末には一時収束する。同様の傾向が他の遺跡でもみられ、西肥留遺跡では木棺墓が旧河道際の自然堤防上に配置されるようになるのは中期以降と考えられる。筋違遺跡では、水田部のIV層上部a-3層は古墳時代前期を通じて耕作の営まれていた可能性があり、居住域と水田域を区画する溝が埋没し上部層であるIV層上部a-2層が水田域の耕作土層となるのは古墳時



第1図 古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群

(KASHMIR 3D を用いて作成)

	山中Ⅱ式	島貫Ⅰ期	島貫Ⅱ期古相	島貫Ⅱ期新相	島貫Ⅲ期古相	島貫Ⅲ期新相	島貫Ⅳ期	備考
高茶屋大垣内				○	○	○		
雲出島貫		△	△	○	○	○	○	
西肥留	○	△	△	○	○	○	○	
赤部				○	○	○	○	
片部・貝蔵								
筋違		○	○	○	○	○		

第1表 時期一覧表

	首長層の居住域・祭殿・倉庫		居住域		導線・区画	食料生産域	墓域	特殊遺物など
	方形区画	大型掘立柱建物	掘立柱建物	竪穴住居				
高茶屋大垣内	○	○		○				庄内甕(生)
雲出島貫				○	○	○	○	磨石・朱付着土器
西肥留			○	○	○	○	○	銅鏡・鉄片・轆羽口・石杵
赤部			○	○	○	○		
片部・貝蔵	?	?		○	○堰	○		土製支脚
筋違				○	○	○		袋状鉄斧

第2表 遺構一覧表

	西部 瀬戸内 瀬戸内	近畿 河内	北陸		伊勢湾岸		太平洋沿岸		北関東
			濃尾	三河	西遠江	東遠江～駿河	南関東		
高茶屋大垣内		庄内甕(生)	甕(布留)						
雲出島貫		甕	甕(タタキ・布留)・小形 埴・有段鉢・器台・高杯	甕	高杯・器 台	壺	高杯	壺・甕	甕
西肥留			甕(タタキ・布留)・有段 鉢・器台・高杯		器台	壺	壺	壺	
赤部			甕(布留)		器台				
片部・貝蔵	支脚		甕(庄内・布留)		器台・甕				
筋違			甕(布留)		器台			壺	

第3表 外来系土器器種別一覧表

	西部 瀬戸内 瀬戸内	近畿 河内	北陸		伊勢湾岸		太平洋沿岸		北関東
			濃尾	三河	西遠江	東遠江～駿河	南関東		
高茶屋大垣内		○	▲						
雲出島貫	▲	○▲	○▲	○	○▲	○	▲	○	○
西肥留	▲	○▲	▲		○	▲	○		
赤部			▲		▲				
片部・貝蔵	○		▲		△▲				
筋違			▲		▲			○	

第4表 外来系土器出土量一覧表

凡例： ○搬入多数 ○搬入 △模倣多数 ▲模倣

代中期以降である。したがって、長期継続する遺跡が多いことが分かる。

そして象徴的な存在であるのが、高茶屋大垣内遺跡である。伊勢湾を見下ろす台地際に方形区画と竪穴住居群が並列して配置されている。方形区画の中には首長層の居住域・祭殿・あるいは倉庫と考えられる大型掘立柱建物が位置し、竪穴住居は円形に位置することから、計画的に配置されていることが分かる。時期的には島貫Ⅲ期古相から新相に限定される。

3 外来系土器の様相

外来系土器の出土量は、伊勢平野においては圧倒的に今回対象としている雲出川下流域の集落からの出土が多い。

弥生時代後期に広域的な土器交流が活発になることは、伊勢湾系土器が近畿地方に流入することや三河系土器が南関東地方に流通する点から知られてきた（小池 2004）が、山中Ⅱ式以降に近畿地方の土器が搬入されていることが西肥留遺跡 S E 260 から出土したタタキ甕・鉢の存在から明らかになり、古墳時代初頭の土器交流につながる初現を山中Ⅱ式に見いだすことができるようになった。

遺跡単位でみていくと、高茶屋大垣内遺跡からは伊勢平野では唯一、生駒西麓産の庄内形甕が出土しているが、近畿系以外の外来系土器は出土していない。そして、雲出島貫遺跡・西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡・筋違遺跡では、複数の地域からの外来系土器が出土している。雲出島貫遺跡では搬入品が多く出土しているが、他の遺跡から出土している外来系土器は胎土や手法の点から模倣品と考えられる二次搬入品の占める割合が多い。

次に地域別にみていくと、近畿系土器は島貫Ⅲ期古相以降に土器組成に取り込まれていく点で東方地域からの外来系土器とは意味合いが異なる（川崎 2001）。本地域は、小形有段鉢が搬入される東限でもある。

北陸系土器は、片部・貝蔵遺跡でまとまった量の装飾器台や甕が出土している。装飾器台は横ミガキによる仕上

げである点などから形態だけでなく在来の土器から系譜を追えない手法を用いる土器ではあるが、刻目が刻まれている点は北陸地方の土器にはみられない特徴である。この刻目は島貫分類（川崎 2001）の壺 Ab・Bb の口縁部や頸部に普遍的に見られる属性と共通する。また周辺の遺跡においても出土しているが、雲出島貫遺跡出土の高杯を除くとほぼ模倣品であり、片部・貝蔵遺跡で一定量の出土をみると併せて近隣で生産していると考えられる。

大廓式土器は雲出島貫遺跡で壺・甕が搬入されており、出土量としても静岡県外では最多量クラスの出土を見る。西肥留遺跡や筋違遺跡においても出土しているが、筋違遺跡出土例は胎土が異なる点などから大廓式土器ではあるが、南関東地方からの二次搬入品である可能性が高い。太平洋沿岸地域での活発な土器交流を反映している土器といえる。また、雲出島貫遺跡では東京湾岸南部（比田井 2003）からの搬入品や北関東系の S 字甕が出土している。

4 雲出川下流域の集落の特徴

島貫Ⅲ期古相には高茶屋大垣内遺跡に方形区画や大型建物が出現した。ところが弥生時代後期から長期間にわたって継続する集落は、土器の様相の変化に連動せずに連続して展開していた。

まず、筋違遺跡で狭い範囲にもかかわらず旧河道と居住域との間に水田域が展開していた状況や片部遺跡で確認されている大規模な堰を伴う水路の存在や水田域の状況からは、後背低地に向かって広い範囲に食料生産空間である水田が展開していると推定される。したがって、これらの遺跡の生活基盤は水田稻作農耕にあると考えられる。

次に、平野部に位置し長期的に継続する集落遺跡が多いなかで、一際目立つ存在が高茶屋大垣内遺跡である。計画的な遺構配置はもとより、伊勢湾を臨む台地縁に立地する点では広い範囲を一望することができる。出土遺物の側面においても示唆的であり、外来系土器の出土量は少ないもの隣接地域ではない生駒西麓産の庄内形甕が出土しており、他の遺跡と質量ともに異なる点で一線を画する。また、雲出島貫遺跡では複数地域からの搬入品が多く出土しているのに対し、その他の遺跡では二次搬入品が多い。そして、西肥留遺跡では金属加工の痕跡が認められた。このように遺跡ごとに外来系土器や遺物の出土傾向が全く異なる点は、それぞれの遺跡や出土地点の性格を反映していると考えられ、遺跡ごとに様相の異なる点が特徴的である。

そして今回、西肥留遺跡・赤部遺跡・片部・貝蔵遺跡が同じ旧河道沿いに遡った地点に立地し、筋違遺跡も一連の旧河道から分岐した旧河道際に立地することが判明し、雲出川右岸地域内の集落間の導線がより明らかとなつた。これらの遺跡の出土遺物の特徴は全く異なることから、均質な遺跡が横並びに存在しているわけでないことが分かる。すなわち、首長層の介在が窺われる高茶屋大垣内遺跡、物流拠点としての雲出島貫遺跡、そして、金属加工の痕跡が認められる西肥留遺跡、北陸系土器の模倣品が多数出土する片部・貝蔵遺跡をはじめとする旧河道を導線とする右岸の遺跡群は、地域として一連の構造をなしている可能性が考えられるのではないか。

5 おわりに

本稿では、近年の発掘調査の成果をもとに、居住域を中心とした集落遺跡の動態を概観するにとどまった。今後、墳墓の展開状況をふまえて再考することにしたい。

【註】

(1) 発掘調査成果と明治期の字切図を参考に昭和 22 年極東米軍撮影の航空写真を判読した結果による。

【引用・参考文献一覧】

- 赤塚次郎 2001 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
川崎志乃 2001 「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター
川崎志乃 2002 「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』vol.13 三重歴史文化研究会
川崎志乃 2006 「S 字系手焙形土器の行方」『古代学研究』175 号古代学研究会
小池香津江 2004 「弥生後期の大和と「山中式」」『山中式の成立と解体』第 11 回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
比田井克仁 2003 「三世紀における畿内の関東系土器－動かぬ関東・動く関東－」『初期古墳と大和の考古学』学生社
※紙面の都合上、報告書類は割愛させていただきました。

古墳時代機織研究の新展開

穂 積 裕 昌

はじめに

古墳時代研究において、木製品は情報の坩堝である。例えば、木器組成は出土遺跡の性格を知るうえで有用であるし、地域的に特徴のある物品の存在は交流や物流を知る手掛かりになる。また、武器・武具類など特定の物品は首長層の介在を予想させるし、原材や未製品の分析は手工業生産を考える基礎資料となる。近年では、使用樹種の検討から植生や生態史的観点からの研究も進められている。しかし、一方で遺物扱いの不慣れや不勉強から豊富な情報を引き出す努力が敬遠されたり、なおざりな調査・研究しかされないこともしばしばである。

木器研究が、物品個々の詳細な検討を基礎にしているのはいうまでもない。いくら組成研究をしても、その前提となる個々の遺物の同定が間違っていれば意味がない。鋤・鍬類など同定が容易な遺物や、剖物容器など単体製品はともかく、複数の部材が組み合ってひとつの製品となる物品は、部材単体で出土するとその同定は困難を伴う。

さて、原始から古代の織機は、原始機→地機→高機と発展したとされる（竹内 1989）。このうち高機は、応神朝や雄略朝の高度な機織技術をもった渡来人の渡来伝承などから5世紀頃に列島に伝來した可能性が説かれてきたが（例えば平林 1998）、高機自体の実態解明はあまり進んでいない。しかも、機織は時代とともに新形式の機織に統一されるわけでなく、古代に属する福岡県沖ノ島出土の金銅製機織は地機であるし、地機のみならず「構造的に原始機」は現在も使用されている。筆者はかつて三重県六大A遺跡出土の断面隅丸長方形の棒状具に糸擦の痕跡を認め、それを高機部材と認定し（三重県埋蔵文化財センター 2000）、これを手掛かりに他遺跡の例も含めて古墳段階での高機の存在を指摘した（穂積 2000a・b）。その後、六大A遺跡出土例と同類の資料が他地域でも確認されはじめ、高機部材自体の研究も進みつつある。しかし、高機部材として認定できる例は少なく、もう少し類品を整理する必要があるし、原始機や地機に関しても最近新たな視点が提起されている。そこで、本稿では、三重県内の最近の出土例を中心機織部材を再検討し、あわせて古墳時代の高機出現の可能性について若干の検討を行いたい。

1 民俗資料調査の重要性

一般に機織は、「布を織る」という行為において経糸と緯糸を組み合わせていく基本構造は変わらず、電動の自動織機出現以降も個人が高機を使って手動で行う手織物は現代に至るまでその命脈を保っている。民俗資料館に行けば、戦前頃まで実働していた高機が鎮座していることも珍しくない。出土部材での状況がいまひとつ不明な以上、基本構造が共通するのであれば、そうした民俗資料と出土品を対比してみるのも一つの方法である。

これに関して、非常に参考になるのが東京都立大学（現、首都大学東京）の考古学研究室が実施した岐阜県宮川村（現・飛騨市）での民俗調査である（石田他 1999、藤田 2000）。この調査では、道具と技術に関する人類誌調査の一貫として飛騨みやがわ考古民俗館所蔵の民俗資料が調査されるなかで、ひとつの高機を解体して個々の部材ごとの実測図を作成するという極めてユニークな研究が行われた。その成果は報告にまとめられ、部材毎の実測図が提示されている（藤田 2000）。

機織具に限らないが、発掘調査の現場では組み合わせの木製品は解体された個々の部材が単独で出土することが通例であり、ひとつの機織を構成する部材がそれぞれに記録されることは出土部材を考えるうえでも有用である。具体的な成果は同書に掲めたいが、本稿においても、適宜その成果を参照しながら出土部材を検証していく。

2 県内資料の概要

a 原始機部材

伊賀市高賀遺跡出土・経送具（1～2） 長方板の片側長辺に浅い抉りを施した形状を呈する。これまで今ひとつ用途不明で、報告書では案の脚の可能性を考えていた（三重県埋蔵文化財センター 1991）。しかし、東村純子氏によって台湾や東南アジアの民俗例との対比から原始機の経送具と同定され（東村ほか 2007）、本例も同材と推定した。

b 地機部材

伊賀市岡田向遺跡出土・杼（3） 断面形は薄い楕円形をなす細長い紡錘形を呈した板材である。片面中央には裾広がりの蟻溝状の割り抜きがあるが、これはここに緯糸を収めるための管室である。管室中央には緯糸を出すために斜めに穿たれた小孔がある。ただし、使用痕たる糸擦の痕跡は認められず、本品は未使用品の可能性がある。

c 高機部材

津市六大A遺跡出土・「経返し具」（4～5） 上述の高機部材と推定した資料である。足元の経巻具に巻いてある経糸を高機の前上部に引き上げ、経糸を作業者の手元に引き寄せるのに反転させるための材と考えた（穂積2000b、なお同誌では「経糸反転材」と呼称）。端部の有孔部は、高機本体の枠材（作業者の両脇から平行して前に延びる枠材）に固定するためのホゾ孔であろう。端部ホゾ孔より内側の片面には多数の糸擦れ痕跡が認められ、その両端角部にも残る。この糸擦れ痕の状況は、本材を支点にして経糸を反転させたことを明瞭に示している。

津市六大A遺跡出土・経巻具機棒（6～9） 片側端部しか残っていないが、飛騨みやがわ考古民族館所蔵の経巻具のハタボウ（機棒）の形状と酷似し（藤田 2000）、同材と推定した。機棒は、直接経糸の端を取り付ける材で、端部に溝を付けて縄紐を掛け、経巻具本体と連接する。ただし、本材は原始機の経巻具としても使用可能であろう。

四日市市辻子遺跡出土・布巻具受脚材（10） 所属年代は古代に属するが、上部の半円形の繰り込みで布巻具を受け、下部の出ホゾで高機基部に挿入・固定した脚材と思われる。多くの部材が方形のホゾで固定される高機にあって、経巻具と布巻具は固定せずに軸を回転させる必要があり、その受部は可動性を維持するため半円形ないしは円形にする必要があった。材中央の弧状の抉りは、作業者の足が高機に接触しないよう作業の便を考えた仕事であろう。一定の高さを有することと共に、作業者に接したところに位置した材と推定できる。

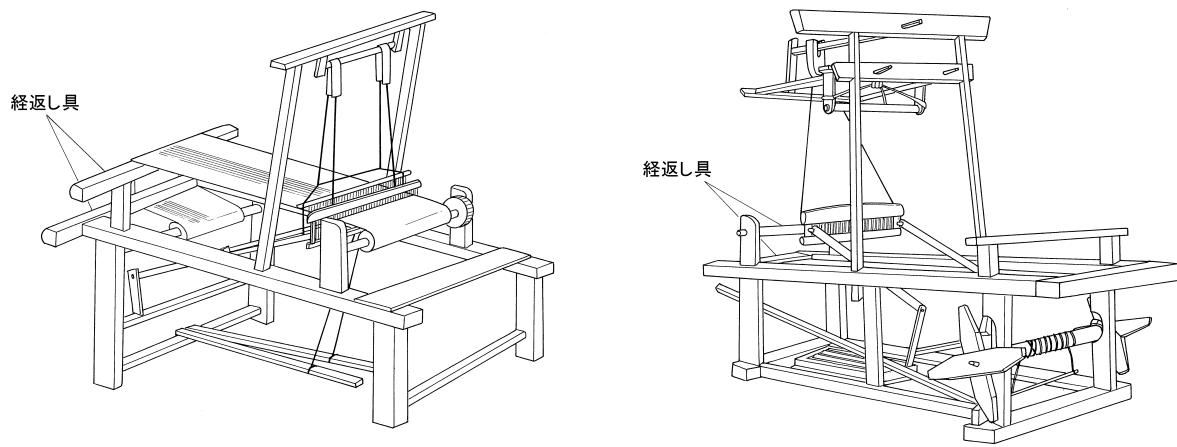
3 県外出土例・民俗例などとの対比

まず、原始機経送具は、東村氏によって群馬県上細井稻荷山古墳出土の滑石製模造品との対比が考えられているほか、いくつかの遺跡で類例の出土が指摘されている（東村ほか 2007）。

杼については、飛騨みやがわ考古民俗館所蔵の民俗資料から、地機用の杼は長さ 50cmから 60cmと長いのに対して、高機用の杼は長さ 25cm前後と短いことが報告されている（藤田 2000）。その指摘を敷衍すると、長さ 71.9cmと長い岡田向遺跡例も地機の杼（刀杼・管大杼）ということになる。

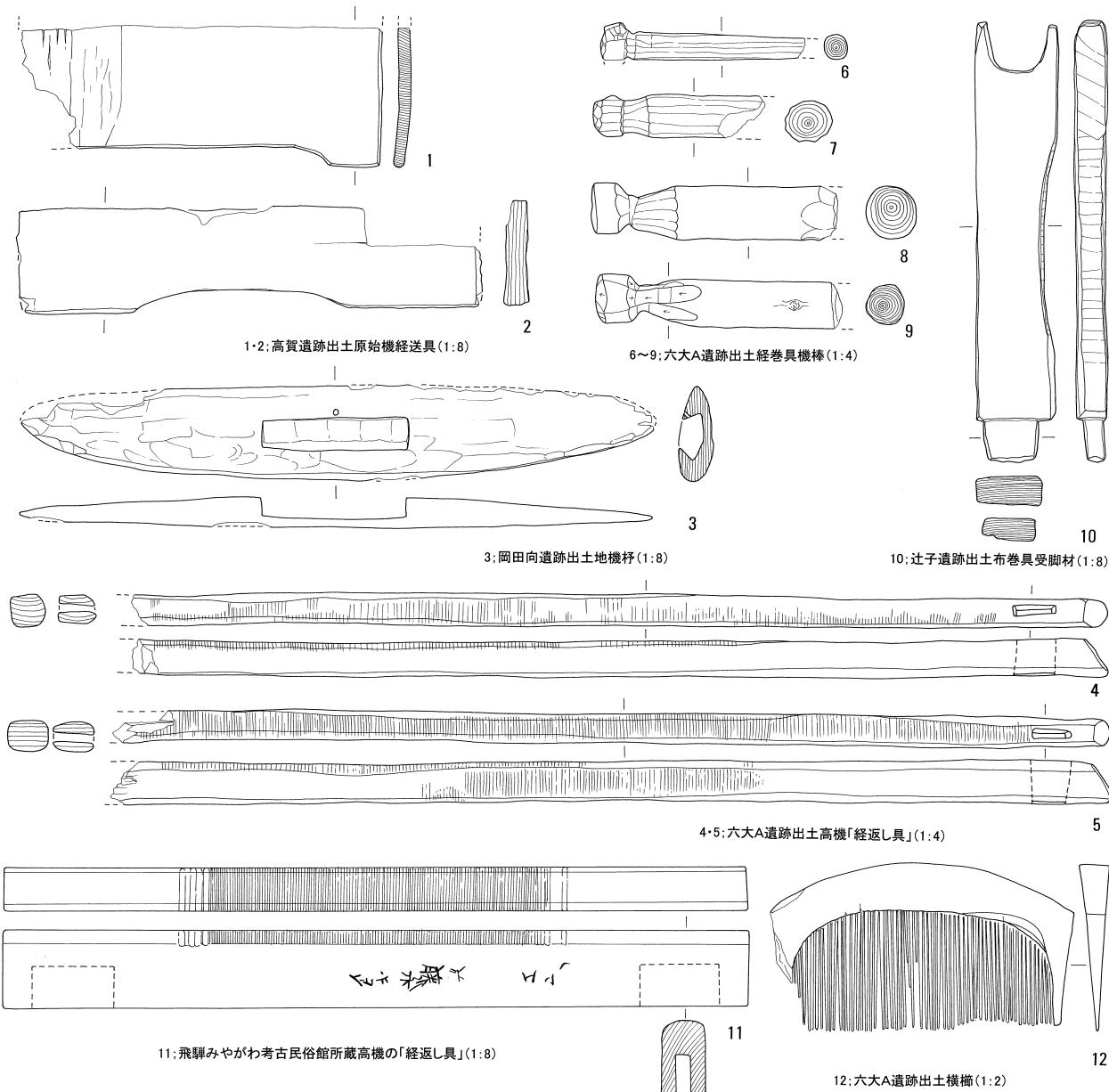
経返し具は、枠材との接合方法が六大A遺跡例とは異なるが大阪府枚方市茄子作遺跡でも出土している（黒須 2006）。また、静岡県伊場遺跡では同形のものを「簇框」（もしくは「簇枠」と呼称し、簇の枠材と考えられている（鈴木 1999）。ただし、東村氏は、伊場遺跡出土品 2 点のうち 1 点を長軸に平行して片面だけに存在する溝の存在から簇框と認定されたうえで、六大A遺跡例と酷似するもうひとつを経の開口にかかる部材とされている（東村 2006）。飛騨の民俗調査でも本材に相当する材が実測されており（11）、法量は異なるが糸擦れ位置などは共通している。

ところで、高機を構成する部材のうち、もっとも製作技術的に高度の精度が要求されるのは簇であろう。現時点では古墳時代の簇の出土例はないが、六大A遺跡では古墳中期段階の細かい歯を作出した精巧な黄楊製の横櫛（12）



第1図 民俗資料にみる高機

左:(財)大阪府文化財センター・日本民家集落博物館2006『カルチュアはっとり No.8』所収の付図を一部改変
右:東京都立大学考古学研究室2000『人類史集報2000』より転載・加筆



第2図 三重県内出土織機とその関連資料

が出土している（三重県埋蔵文化財センター 2000）。この横櫛は、箠と同等の技術で製作されたものと理解でき、少なくとも古墳中期段階では箠を製作できるだけの技術は担保されていたとみてよかろう（穂積 2000b）。

10で可能性を考えた枠材については、まだ明瞭な報告例は承知していないが、これまで「有孔板材」などとして報告されているものなかに、本材に相当するものが混じっている可能性がある。ちなみに飛騨みやがわ考古民俗館所蔵の布巻具受脚台は円形のホゾ孔を穿った形式で、ここに布巻具の端部を挿入していた（藤田 2000）。

このほか、県内には現時点で類例は認めがたいが、高機の部材とされるものに6世紀後半の滋賀県正源寺遺跡出土布巻具がある。両端を別材に挿入できるよう細く削り出したもので、身の中央には溝が入る（林 1999）。

4 まとめ

三重県出土の古墳時代機織を中心に、各地の地機と高機の部材を民俗資料とも対比しつつまとめてみた。今回提示した多くは、布や糸を巻くなど直接糸や布と接する部材を中心としているが、実際の織機（とくに高機）は、それらを組み合わせて固定するための「枠材」に相当する部材（10のような部材）とセットで使用された。各種の枠材は、それ単独で出土した場合には糸（布）巻具など以上にその同定には苦心することになろうが、逆にいうとそれらは「織機」とは同定されない不明品として、既に各地で出土していることも予想される。同定を進めるためには、前提となる部材同定案が提示されている必要があり、それを経てでないと各地の部材認定も進まない。

今回提示した織機関係の部材は、糸擦れ痕の存在などからその同定は一定の根拠を持つであろう。そういう意味では、列島における古墳時代段階の高機の存在を、考古資料から一定は提起することができたと思われる。ただし、古墳時代や古代以降も通して原始機もなお有力であり、単純に地機や高機に転換するわけではない。また、高機の部材認定も現況では専ら民俗資料に拠っており、当該期の組み合ったかたちでの出土例の確認が待たれる。

今回的小文は、これまで高賀遺跡や六大A遺跡、辻子遺跡などの調査もしくは報告に携わったことによって得た問題意識に基づいたものです。貴重な民俗調査に参加する機会を許された山田昌久先生をはじめとする首都大学東京（調査当時は東京都立大学）のご一同と、いつも多大なご指導を得ている出土木器研究会の諸先生・諸氏に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 石田浩司他 1999 「宮川村生活用具調査 紡織具調査」『人類史集報 1999』東京都立大学考古学研究室 : pp180 ~ 205
黒須亜希子 2006 「茄子作遺跡出土の木製品について」『大阪文化財研究』第 27 号 財団法人大阪府文化財センター
鈴木敏則 1999 「遠江における原始・古代の紡織具」『浜松市博物館報』第 12 号 浜松市博物館
竹内晶子 1989 『弥生の布を織る』東京大学出版会
林順 1999 「五個荘町正源寺遺跡出土の木器について」『滋賀考古』第 21 号
東村純子 2006 「織物と紡織」『列島の古代史 ひと・もの・こと 専門技能と技術』
東村純子・川崎雅史・仲原知之 2007 「野田地区遺跡出土の機織具—上細井型経送具の諸例—」『紀伊考古学研究』10
平林章仁 1998 『七夕と相撲の古代史』白水社
藤田雅子 2000 「宮川村の織機部品調査」『人類史集報 2000』東京都立大学考古学研究室 : pp104 ~ 125
穂積裕昌 2000a 「出土遺物にみる高機出現の可能性」『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』三重県埋蔵文化財センター
穂積裕昌 2000b 「出土遺物からみた織機研究の現状」『人類史集報 2000』東京都立大学考古学研究室 : pp132 ~ 140
三重県埋蔵文化財センター 1991 『平成 2 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第 3 分冊—』（高賀遺跡）
三重県埋蔵文化財センター 2000 『六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』
三重県埋蔵文化財センター 2004 『辻子遺跡発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター 2007 『岡田向遺跡・本田氏館跡発掘調査報告』

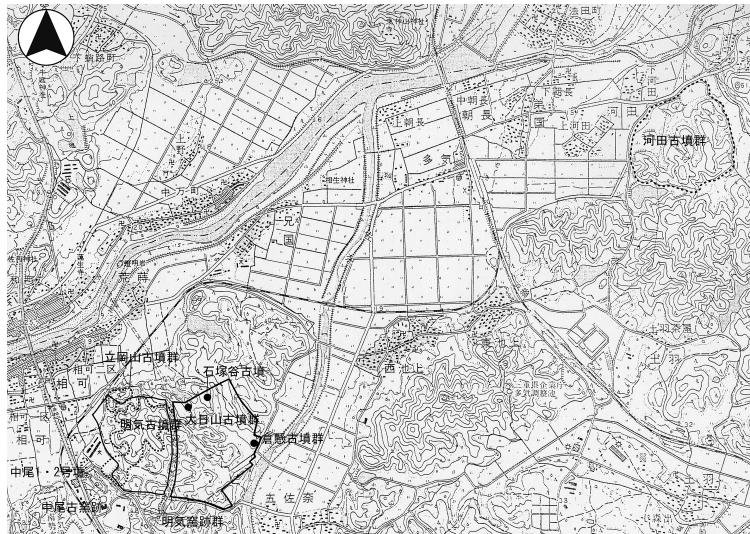
多気町相可 立岡山・明気丘陵の古墳出土資料について

山 中 由紀子・大 川 操

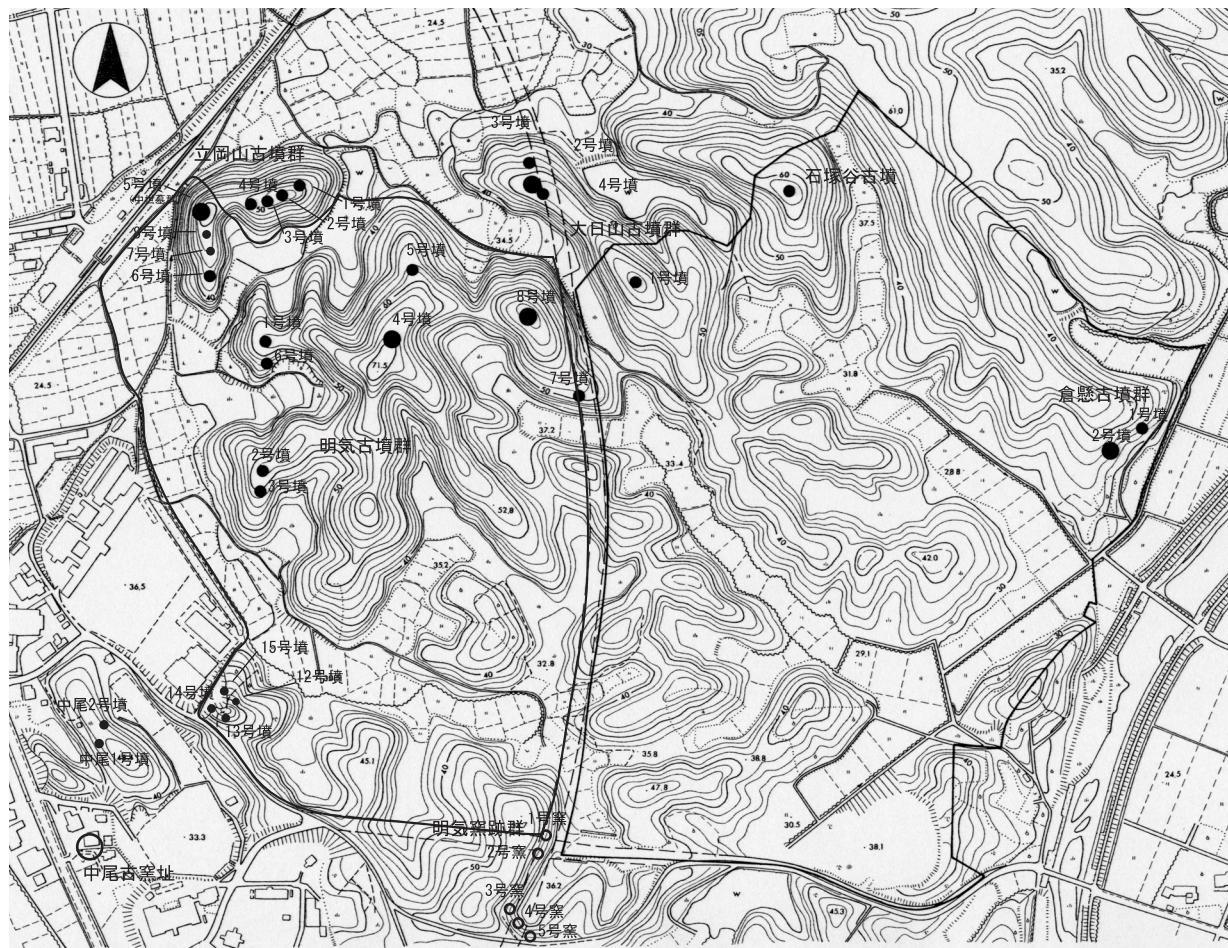
はじめに

伊勢本街道を南進し櫛田川を渡ると、多気町相可に至る。一面に拡がる田園地帯を南東から見下ろす丘陵地には、立岡山中世墓群や立岡山・明気古墳群をはじめとする石塚谷・大日山・倉懸古墳などの多くの古墳群が点在する。これは町内では北東約5kmにある河田古墳群に次ぐ規模の古墳群であるが、昭和60年代に計画があがつた工業団地造成・住宅団地造成・国道42号松阪多気バイパスの建設によりその大半を記録保存とせざるを得ないこととなり、多気町教育委員会を主体として発掘調査が行われた。

工業団地予定地であった丘陵北東部では、6世紀後半の石塚谷古墳から刀身に規格的に



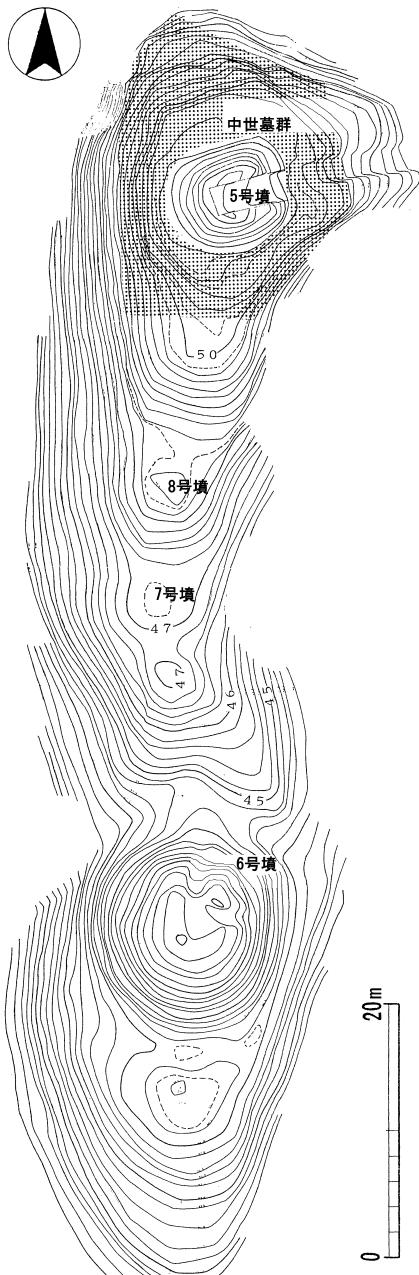
第1図 多気町相可周辺遺跡位置図 (1:50,000)



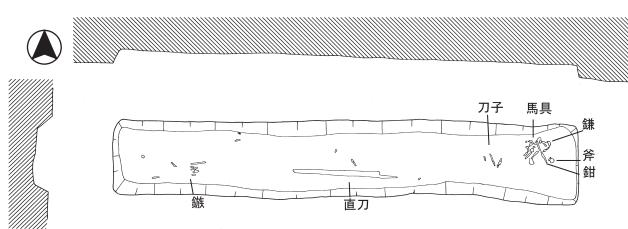
第2図 立岡山古墳群・明気古墳群位置図 (1:8,000)

魚・鳥・日輪等の象嵌模様を施す直刀が出土し、また住宅団地となる立岡山丘陵では13～15世紀にかけての中世墓群が丘陵北西隅を中心に造営されていた。中世墓の下層、さらに明氣の丘陵上には、素環鏡板の馬具を中心とした副葬が行われた古墳群が形成されていたことも明らかとなった。

これらの報告については、多気町教育委員会刊行の調査報告により公表されているが⁽¹⁾、立岡山・明氣古墳群出土遺物のうち、とりわけ金属製品については、報告書刊行時に遺物の保存処理のために詳細な報告が掲載できていない。ここでは、その未公開の資料を中心に概要を紹介し、周辺古墳群との副葬品の様相について触れてみたい。



第3図 立岡山丘陵西端測量図 (1:600)



第4図 立岡山 6号墳埋葬施設 (1:60) (報告②に加筆)

1 立岡山古墳群概況

立岡山古墳群は多気町相可に所在し、JR 紀勢本線相可駅の北東に位置する。標高約 50 m の独立丘陵上に 8 基の古墳が確認されている。住宅団地造成に伴って削平される南北尾根筋上の 5 号墳～8 号墳が発掘調査され、北西方向に櫛田川を眺望できる 5 号墳上には稻荷神社があり、中世墓群が展開していた。

(1) 立岡山 5号墳の遺物

古墳盛土上に 13～15 世紀にわたる中世墓群が築かれ、また稻荷神社の設置で古墳の埋葬施設は跡形なく破壊されていた状況であった。中世墓も五輪塔や石組みなどが表土とともにかなり流出していた中で、搅乱された古墳の副葬品と思われる鉄製品が散在していた。中世墓 SX 5・SX 6 とされた 5 号墳南西斜面から鉈 1、また 8 号墳の北東に位置する中世墓 SX 1 の遺物として報告される釘(刀子) I-3⁽²⁾ (本報告 2) は、古墳副葬の鑿と考えられる。

鉈 1 は刃先がスプーン状に湾曲し、鎬が明瞭に入る。柄木の木質が銹着する。鑿 2 は、やや長方形断面の茎、両角闊、頸部から刃先に向けて先細りし、刃先は欠する。平鑿あるいは鑿と考えられる。

(2) 立岡山 6号墳の遺物

報告書記載の副葬土器は、棺跡東方約 1.5m (墓壙か) から土師器高杯脚部、須恵器有蓋高杯 2 点、須恵器杯身蓋 1 点、甌 1 点の一群、また棺上から須恵器杯身・高杯・器台といった組成で、田辺昭三氏⁽³⁾の編年による (以下、田辺編年とする) MT15 型式併行期に相当するものとみられる。

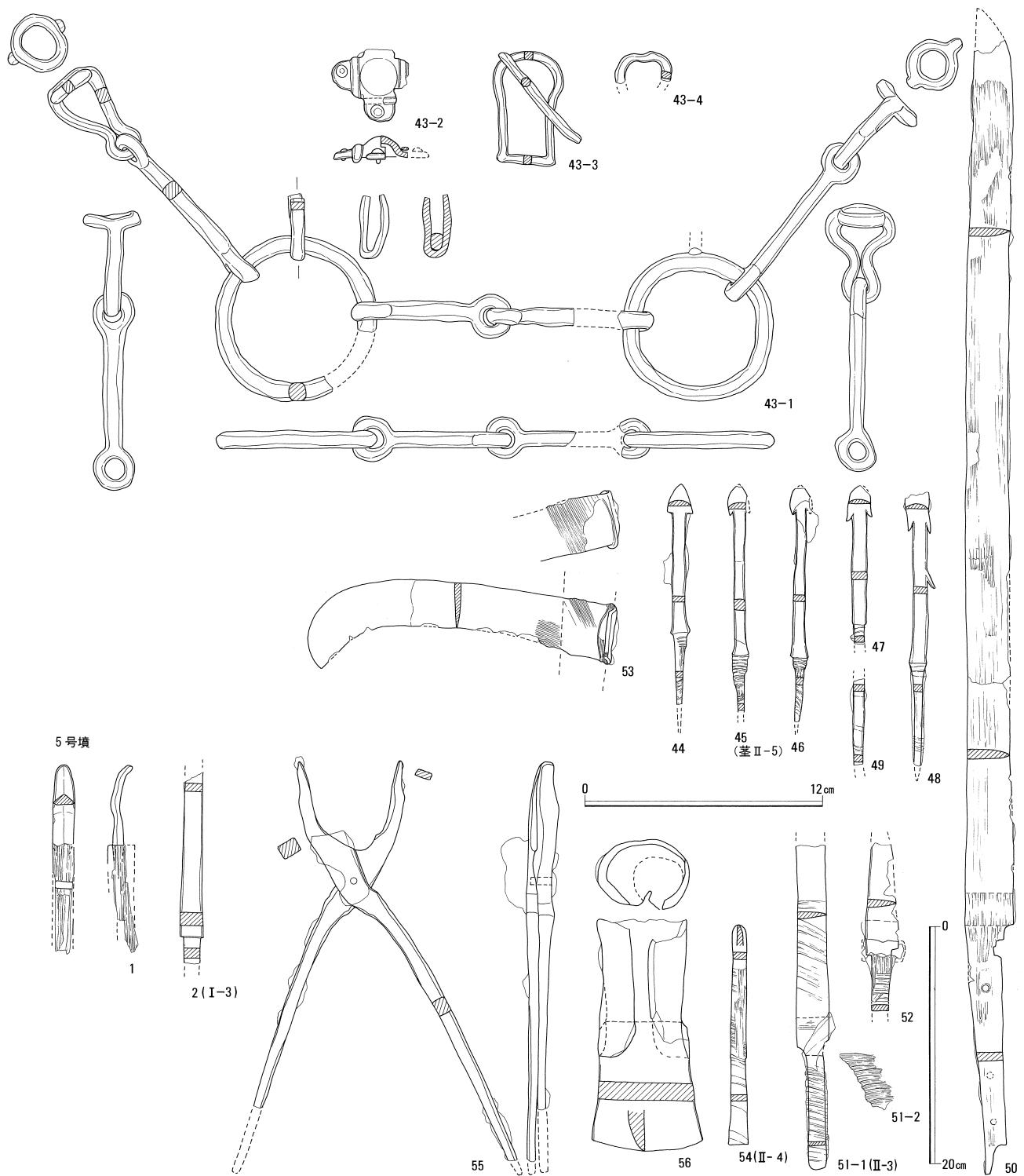
金属製品については、棺内東端から馬具、鎌・斧・鉄鉈・刀子 (51 報 II-3) の一群、棺東木口にあたると思われる場所で刀子 (52)・丸鑿、棺内中央南壁寄りに直刀、棺西端から鎌が出土した。(大川)

馬具 43 素環部はほぼ正円を呈し、円環金具を立間とする。轡の他

に、鉄製半球形辻金具と鉸金具が出土しており、面繫を構成する馬具が副葬されていたといえる。その形式から、多気町域の他の素環鏡板付轡に先行する、6 世紀前半のものと考えられる。(山中)

工具 上記の轡に銹着して鉄鉈 55 が出土。箸先は支点

から約2.5cmは湾曲し、先端約1.0cmは断面を長方形に平たく潰して掴み部とする。斧56は鋳造の刃部に別造りの鍛造袋部が巻きつけられ、袋内部に柄木の木質が銹着する。刀子51の柄には柄頭から関方向へ巻き上げた樹皮が良好に残存する。刀身にも鞘の下地とした樹皮巻きの痕跡がみられる。柄元位置に、樹皮を巻き上げ漆で固めた、柄元装具と思われる部品が接合する。関部に方形断面の捩りをもった別個体の部品が銹着するため、両関ではあるが形状は特定できない。鎌53は曲刀鎌で、柄装着部には両面ともに有機質が良好に遺存する。刀子52の柄には下地樹皮が茎尻から関方向へ巻き上げてあり、その上に柄木木質が銹着するが、表装材は不明である。関は両関で角関



第5図 立岡山5・6号墳出土遺物 (1:3 50のみ1:5)

で、柄元には皮革と思われる有機質を漆で固めた柄元装具が銹着する。刀身にも柄元装具に似た有機質が残り、皮革製鞘を伴った可能性がある。丸鑿 54 の柄は、柄頭から皮革状有機質を巻上げた後、樹皮の下地巻きを巻き上げる。

武器 直刀 50 は切先を欠損する。身幅 4.0cm、関は棟側が斜角関、刃側が角関となる。茎尻は隅抉り、目釘孔は釘を残す 2 孔があり、中間にもう 1 孔あるかもしれない。柄元の関直下に抉りが入る。刀身・茎ともに、木質が多く銹着する。鎌 44 ~ 49 はいずれも尖根系長頸鎌で、鎌身は三角形や柳葉となる。48 には頸部に独立片逆刺がつく。

2 明気古墳群概況

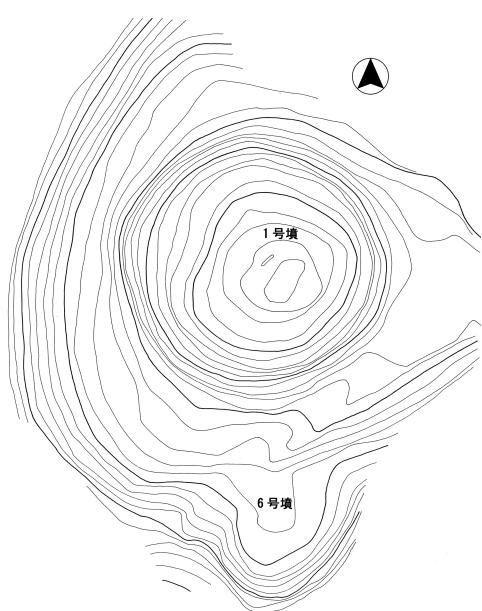
立岡山古墳群と同じく、多気町相可に所在し、住宅団地造成に伴い明気 1 号墳～8 号墳、12 号墳～15 号墳までの計 12 基の古墳が調査された。当古墳群は立岡山古墳群の南東側に対面する丘陵上に展開する 8 基と、南西側の細長い谷を挟んで、多気中学校がある北西方向へ延びる別筋の尾根上で見つかった 4 基との、計 12 基で構成される。7・8 号墳の踏査時に、9～11 号墳とした 3 基の高まりがあったが、これらは自然地形と判断された。多気中学校側の丘陵では、昭和 38 年の中学校造成時に須恵器等が出土し、4 基以外にも古墳が点在した可能性がある。

既刊の報告書では、1～8 号墳が点在する丘陵上的一群を明気古墳群 A、12～15 号墳側を明気古墳群 B とする。明気古墳群 A では、複雑に入り出する尾根ごとに 1～2 基ずつ古墳が築造されていて、7・8 号墳の発見された東支群、5 号墳のある北支群、丘陵中央部の最高標高点近くに築造された中央群、立岡山丘陵側へ突出する尾根に 1・6 号墳が築かれた西支群、これに谷を挟んで対峙する 2・3 号墳のある南西支群に分かれれる。

(1) 明気 1 号墳の遺物

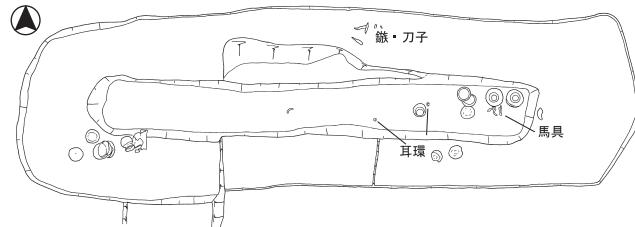
西支群の尾根において最も標高が高い地点に 1 号墳は位置する。1 号墳の副葬品は、棺跡東木口に須恵器杯身蓋、棺跡東端に須恵器広口壺と馬具、棺内から耳環が出土する。棺外墓壙内の遺物としては、棺東木口の南側に杯身 2 点、棺西木口の南側に須恵器杯蓋 2 点、広口壺 1 点、土師器丸底甕 1 点が、また棺中央の北側棺外に刀子・鎌が副葬される。さらに墓壙上副葬として、須恵器提瓶・杯身などの一群がある。これらは主として田辺編年の TK209 型式併行期に属するとみられる。以下、未報告の金属製品について概述する。(大川)

馬具 14 方形立聞素環鏡板付轡は立聞の幅が狭いもので、素環部鉄棒の中央につくのではなく、素環鉄棒の背面に揃えて立聞を鍛接している。なお、引手金具は向かって左側については引手壺近くで、右側は引手壺は欠損しているが全体的に揃っている。ただ、筆者の観察が甘く本来は引手の他の部分にも見られることかもしれない。(山中)



第 6 図 明気 1 号墳・6 号墳測量図 (1 : 400) (報告②に一部加筆)

刀子は 3 個体出土し、16 は茎および刀身に樹皮の下地巻が銹着する。また幅 0.9cm の鏝痕跡が観察される。背関・刃関とも斜角関である。17 は切先を欠損するものの茎の方が長い。関は背・刃関ともに角関、茎には下地の樹皮巻と鹿角装が確認できる。茎先端は栗尻である。15 は刀身片。細身の刀子である。耳環 21・11 は銅芯金薄板貼。接面にたたみ込みがあるが、下地については不明。22・10 は銅芯銀地で鍍金された可能性がある。10 では下地を接面へわずかに折り曲げ、別蓋を被せる。(大川)



第 7 図 明気 1 号墳埋葬施設 (1 : 80) (報告②に一部加筆)

(2) 明気6号墳

1号墳と同じ尾根上に、1号墳の南側でやや低い斜面に築造される。東西に主軸をもつ埋葬主体部を確認している。

副葬土器は、東木口に須恵器杯蓋・杯身、西木口棺跡隅に須恵器横瓶・土師器丸底甕、棺外墓壙内には棺跡西木口の北側に須恵器高杯・提瓶・甕・土師器高杯の一群が、また墓壙東端部に土師器甕の副葬がみられる。須恵器は、田辺編年のTK209型式併行期に相当するものとみられ、6世紀後葉～末期にかけて築造された古墳と考えられる。

土器以外の遺物としては、棺内からガラス小玉が2点出土するのみである。

ガラス小玉 11 は水色不透明の小玉で、管材からの管切により製作されており、孔面から見て気泡が渦状に軌跡を描く。**12** は紫紺色の小玉で、管材から管切で切り離され、孔面も丁寧に研磨する。

(3) 明気2号墳

南西支群の尾根先端に位置する2号墳では、過去の土取によって、古墳の西半が壊されており、埋葬主体部の東半の遺物を確認するにとどまる。

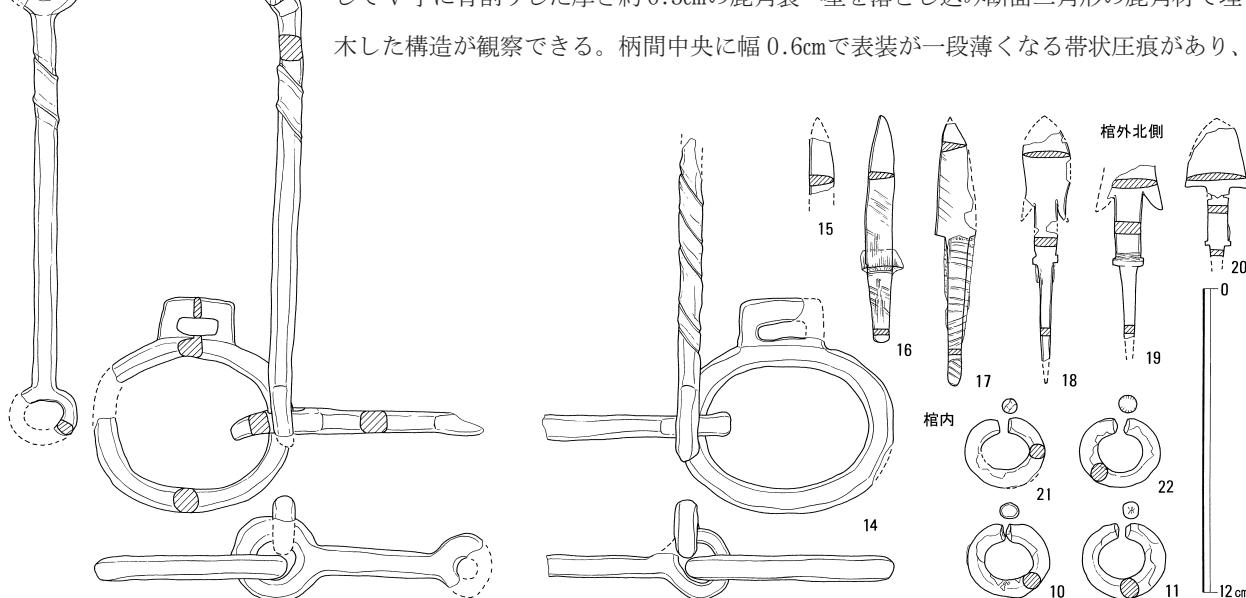
副葬土器は、すべて棺外東木口に集中しており、須恵器杯身蓋10セット、長方形1段透かしの入る無蓋高杯1点、長方形2段透かしの無蓋高杯1点、有蓋高杯1セットと高杯のみ1点、短頸壺2点、広口壺5点、直口壺1点、台付直口壺1点、甕1点からなる。一段階前の様相も甕や直口壺などに残すものの、田辺編年のTK43型式併行期を主体とする6世紀（中～）後葉の造営と考えられる。

金属製品については、棺内に鐔付直刀と鹿角装短刀が、切先を棺内中央、刃部を棺外へ向けて置かれる。棺外墓壙内の東木口の土器群下から刀子、東木口北側に刃部を南西向きにした斧、棺外墓壙内の棺跡中央南側壁際に鏃が切先を北東向きに副葬される。

鐔付直刀 35 刀身幅4.2cmの直刀で、茎は茎尻に隅抉りが入るものとみられるがその先端を欠損する。目釘孔は2孔、柄元に抉りが入っていると思われるが、刀身から茎にかけて、鞘・柄木の木質が銹着するために明確でない。この直刀には、6孔透かし窓の鐔が伴い、鍔と鞘口の木質を良好に残す。透かし窓の穿孔位置は極めて不均等であり、形・大きさ共に不揃いである。鐔縁辺に纖維が銹着しており、平織りの織物に接して副葬されていたことを示す。

鹿角装短刀 36 は刀身幅2.2cmの短刀である。刃部には鞘の木質を両面に良好に残す。関は背関・刃関ともに角関でここへ幅1.1cmの鍔が遺存し、皮革かと思われる有機質材が黒褐色の樹脂状蛻化膜として観察される。柄材が下地から表

装まで良好に遺存していて、地金に樹皮を巻き上げた上に薄く木芯を付け、表装材としてV字に背割りした厚さ約0.5cmの鹿角装へ茎を落とし込み断面三角形の鹿角材で埋木した構造が観察できる。柄間中央に幅0.6cmで表装が一段薄くなる帶状圧痕があり、



第8図 明気1号墳 出土遺物 (1:3)

柄頭までの約4.5cm間に幅0.3cmほどの平たい圧痕が連続して鹿角装に残る。縫りの痕跡は見出せないことから、革紐などの有機質で巻き締めていたものと推測できる。柄先端（柄頭）は柄間よりもわずかに張出して、一体造りで柄頭を削り出していたものとみられる。刀子43は茎先端をわずかに欠く。刀身幅は1.5cm、背関は斜関、刃関は角関、茎から鋸と思われる位置までは柄下地と思われる樹皮巻が見られ、柄縁の木質圧痕が0.9cm幅で残る。斧37は鋳造刃部に鍛造袋部を取り付けた斧である。X線透過像から、刃部の長さは7.8cm、袋部との境に肩が確認できる。鎌38～42は広根系・平造りの長頸鎌で、41が腸抉柳葉鎌であるほかは三角形鎌である。38と42は銹着しており、頭部関は棘関、矢柄の木質と口巻である樹皮巻きが残る。39は同じ三角形鎌であるが関は角関である。

(4) 明気4号墳

明気丘陵において最も標高の高い、中央部に位置し、南北方向に主軸をもつ埋葬主体部を1基確認している。

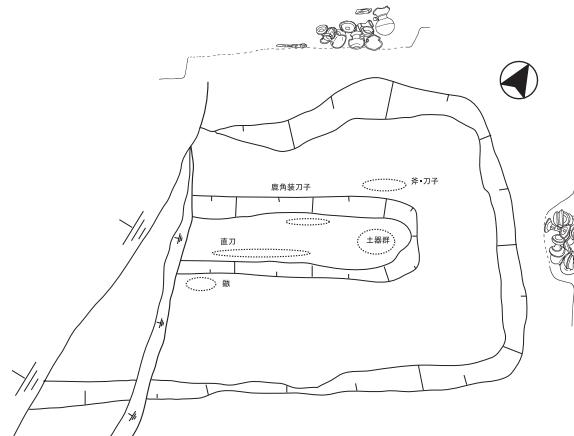
副葬土器は、すべて棺外、南北両木口に副葬されており、北群には須恵器杯身2・有蓋高杯2・長頸壺・台付長頸壺・甕・広口壺2・提瓶・土師器丸底甕3、南群には須恵器杯身蓋・広口壺・横瓶が置かれていた。これらの須恵器は、田辺編年TK43～TK209型式併行期に属するとみられ、6世紀後葉の築造が考えられる。

土器以外の副葬品として、棺内からは耳環1対と玉類が、棺外北木口の土器群下からは馬具、また棺外墓壙内から滑石製紡錘車が1点出土する。（大川）

素環鏡板轡21 1号墳と同様のつくりの素環鏡板付轡である。1号墳のものに比して引手壺の屈曲角度は浅い。引手金具は筆者が確認できる範囲では、向かって左側の引手に4回の、右側には3回の捩りがあるようである。（山中⁽⁵⁾）



第9図 明気2号墳・3号墳測量図 (1:400)



第10図 明気2号墳埋葬施設 出土状況略図 (1:60)
(報告②から作図)

耳環19・20 はほぼ正円に近い耳環で、接面は隙間なく閉じられる。中空の銅地に巻き付けた金薄板をわずかに接面へ折り曲げ、X線透過像によると、接面には別材の薄板で蓋を被せていることがわかる。**勾玉22～25** は瑪瑙製で、形状はいずれも厚みが極端に薄く、「コ」字状の角を丸めた程度の整形である。通有の明橙色のものから明橙色と乳白色とのマーブル色、まったくの乳白色のものと色彩は様々で、いずれも透明度は低く、玉髓（半透明で縞模様をもたない）に類する玉材である。**碧玉製26** は、「C」字状の丸みを持たせて研磨されている。深緑色でわずかに灰緑色の縞が入る。**管玉27** は細身でやや短めである。碧玉製で、縞のない単色部分を使用する。**ガラス小玉28～36** はいずれも紫紺色の半透明である。管切で製作し、孔面も両面を研磨する。**紡錘車37** は滑石製である。丁寧に研磨されており、端部以外は放射状や綾杉状に線刻が施される。端部に磨耗する箇所がある。

(5) 明気7号墳

8号墳の南東の標高50m付近に造営される、東西方向に主軸をもつ埋葬主体部が確認されている。

副葬土器は、宝珠形ツマミがついた須恵器杯蓋と杯身が出土する。これらは田辺編年のTK217型式併行期に属すると考えられ、7世紀前半に造営されたとみられる。

土器以外の副葬品としては、耳環が1点のみ確認されている。

耳環4は接面をわずかに開く。銅芯に銀下地を巻き、鍍金される。下地材は接面中心部まで丁寧にたたみ込む。

(6) 明気8号墳

明気古墳群丘陵の東へ張り出した尾根頂部（標高67m）に造営され、東西に主軸をもつ埋葬主体部が確認される。

副葬土器は、棺両端木口に土器群が検出され、東群には須恵器杯身蓋3セット、台付直口壺（蓋付）・提瓶・甌などが、西群には須恵器杯身蓋・台付直口壺（蓋付）・短頸壺などが副葬される。これらの須恵器は田辺編年によるTK43型式併行期に相当するとみられ、6世紀後葉に造営された古墳と考えられる。

金属製品は、西土器群の棺木口側に鎌束と刀子が副葬されていた。

鎌17～21 17は広根系腸抉柳葉形の鎌で平造りである。両端の逆刺を欠くものの、頸部関の棘関、茎に矢柄木質が銹着する。18～21は尖根系柳葉鎌で、頸部関は18が台形、他は棘関であるとみられる。**刀子22**は短小で、背関は斜関、刃関が角関とみられる。茎には下地の樹皮巻と柄木質が銹着する。柄元には木質が銹着しており、接点を確認できないものの、22-2の柄元装具が装着されていたのではなかろうか。

(7) 明気12号墳～15号墳

明気古墳群Aの丘陵から細長い谷を挟んだ南側で、明気窯跡群のある丘陵の西北端に12号墳～15号墳がある。中学校の造成時にも須恵器等が出土し、この支群では土器副葬しかされていない。いずれも7世紀代に比定できる。12号墳で短刀が1点出土しているが、12号墳上には庚申塔や役行者像の石祠があったとされ、尾根頂部には浄土寺の墓地があったこと、遺物の関形状などから、近世墓（中世まで遡るか）に由来する可能性が高い。

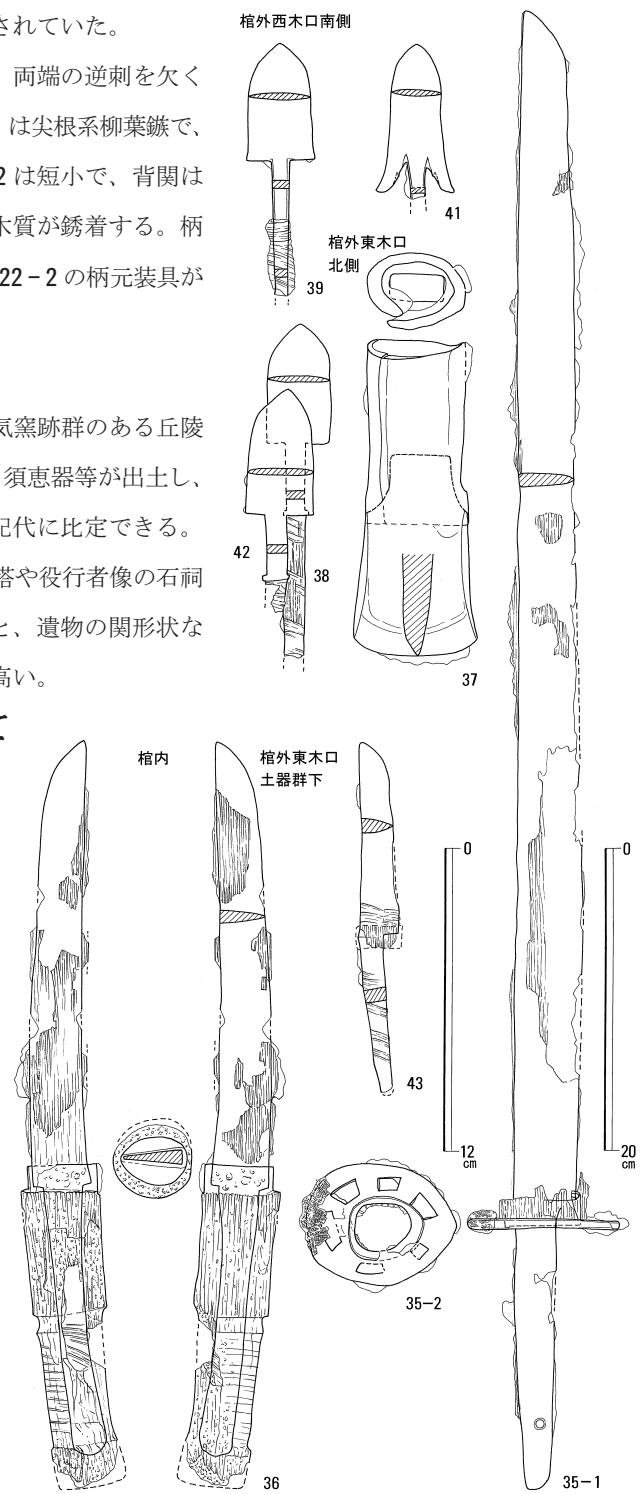
3 立岡山・明気古墳群の特性～まとめにかえて

概観してきた未報告の資料と既刊報告の土器資料から、副葬品の様相を、近接する周辺古墳群と比較して見出せる特性を抽出してまとめとしたい。

(1) 石塚谷・大日山・倉懸古墳との副葬品諸相

当該地域で先行する立岡山6号墳における鍛冶関連の背景が注目される。後続する立岡山・明気・大日山・倉懸各古墳群へと展開する中で、全体的に工具の副葬は継続していく傾向があるが、武器の副葬が大日山・倉懸が立地する丘陵東部の古墳では、極めて小規模であり、武器・馬具・工具・装身具のすべてが象嵌大刀を出土した石塚谷へ集約された感があるのに対し、立岡山・明気の丘陵西部では武器の副葬が続いているのがみられる。そして、明気において素環鏡板の分布が集まるが、丘陵東部の石塚谷が見せる馬具の金銅装飾には至らない。

一方、装身具の保有状況に目を向けると、相対的には少量であるなか、丘陵東部に立地する石塚谷のガラス粟



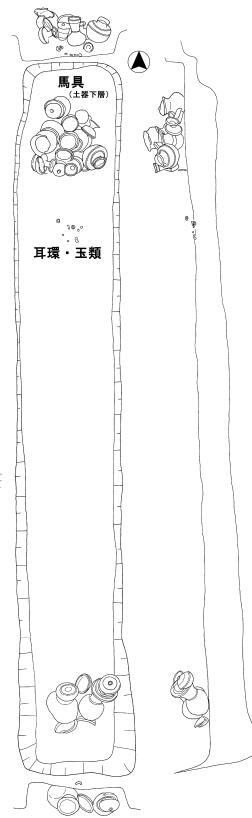
第11図 明気2号墳 出土遺物 (36～43 1:3 35 1:5)

玉と水晶管玉といったコントラストの強い装身具の副葬に限定されるのに対し、明氣ではガラス玉は小玉で極めて微量であること、勾玉を主として瑪瑙、そしてポイント的に碧玉製の勾玉・管玉を組み入れる点など、河田古墳群との類似性も見受けられるが、耳環の保有数量と有機質素材の装身具を持たない点で河田と大きく異なる。⁽⁶⁾⁽⁷⁾伊勢の中南勢地域における当該時期群集墳を概観したときに、有機質素材の玉製品を保有する古墳群の多くでは石室を導入していく傾向がみられる中で、金属製品の副葬セットからうかがえる半島系様相を持ちながらも、立岡山6号墳（6世紀前葉）から倉懸・明氣B支群（7世紀代）まで木棺直葬が続き、有機質装身具を保有する埋葬施設が一基もみられないことが当該地域の古墳群における特性の一つであり、被葬者および古墳造営の背景集団の特徴を表しているものと考えられようか。（大川）

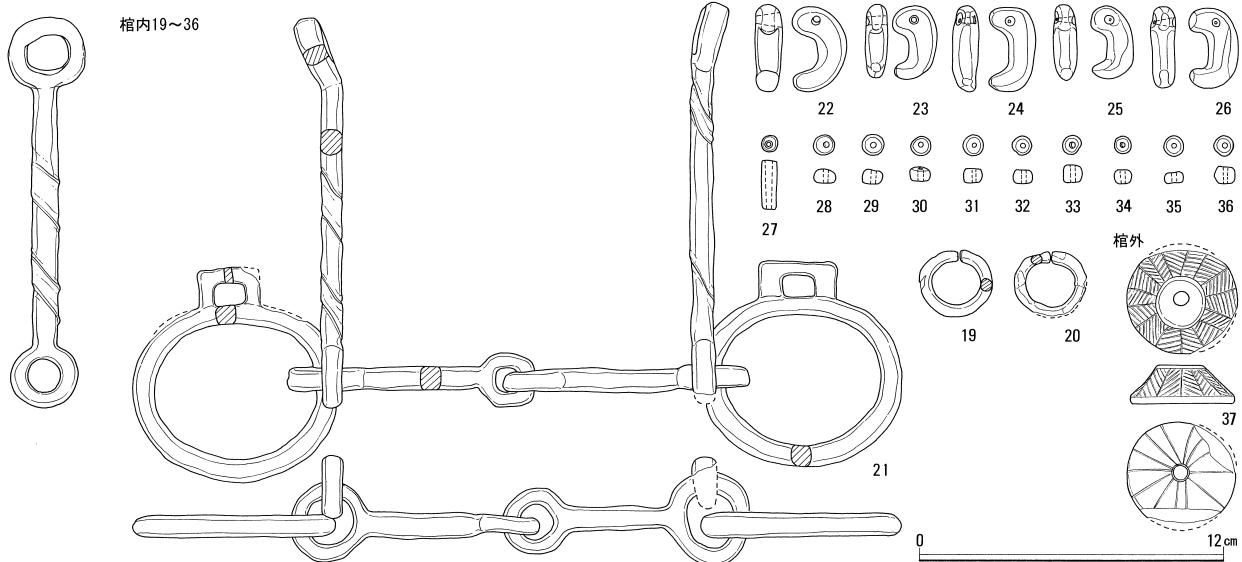
（2）素環鏡板副葬古墳の地域特性と地域間比較

素環鏡板付轡は、三重県内では6世紀後半以降に出土例が増える。その分布については、本稿で紹介した明氣古墳群の位置する櫛田川流域に集中する。三重県内の馬具の出土は、鈴鹿川中流域、志登茂川・安濃川中流域（津市）、雲出川中流域、櫛田川流域、宮川と五十鈴川に挟まれた伊勢市域、木津川支流の伊賀市域の部分、同じく木津川支流である名張川流域（名張市域）に集中して見られる。5世紀後半から馬具の出土が見られる鈴鹿川流域、志登茂川・安濃川中流域（津市）、雲出川流域、木津川支流の伊賀市域の部分とは異なり、櫛田川流域は6世紀と前掲の地域とは馬具の出現が遅れる。そして、櫛田川流域において6世紀後半以降見られる轡は全て素環鏡板付轡なのである。

第12図 明氣4号墳測量図（1：600）



第13図 明氣4号墳埋葬施設出土状況図（1：50）
(報告②に一部加筆)



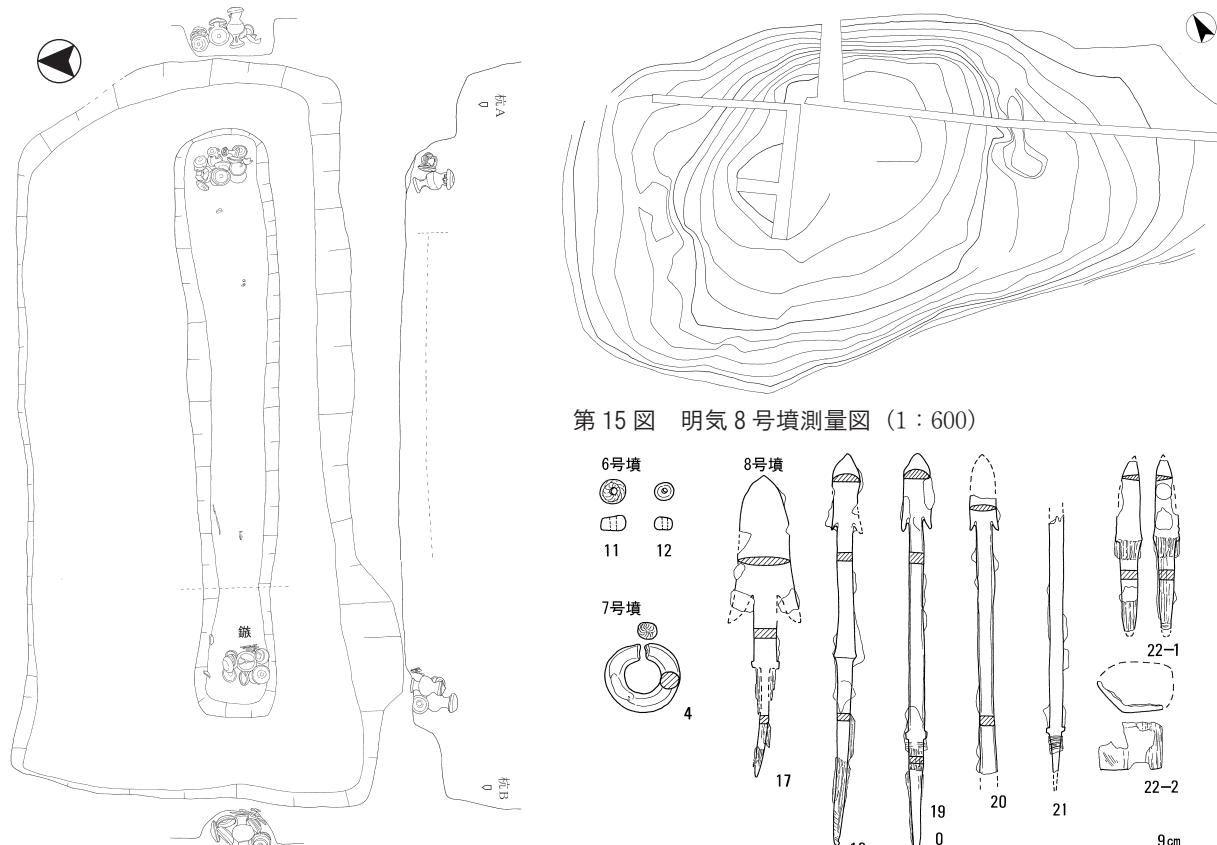
第14図 明氣4号墳出土遺物（1：3）

鉄地金銅張鏡板を持つ轡と同時期に出土する素環鏡板付轡とは、その出土状況などから階層性があり、鉄地金銅張鏡板付轡の方が優位に立つことを指摘した。⁽⁸⁾しかし、三重県内において鉄地金銅張鏡板付轡の出土が減少し、素環鏡板付轡が主体となる6世紀後半代について、そのような比較検討は難しい。そこで、この馬具を持つ古墳の性格について考える手立てとして、馬具が実際に使用されたもののかを検討する。筆者が実見した中で、馬具の補修痕や鉄の磨耗の状況を見ていくと、三重県内では鉄製板状鏡板付轡と素環鏡板付轡において補修痕や磨耗の状況が確認できる。本稿で検討した多気町内の馬具についても、河田B2号墳轡で磨耗痕が見られ、石塚谷古墳轡・鎧で修理痕が見られる。

出土例が少なく、多気町内で出土する馬具について特徴を見出すことは難しいが、敢えて挙げるとすれば、多気町内の馬具は葬具としての馬具ではなく、被葬者の生前の持ち物としての意味合いを持って副葬されたものであるという点を指摘することができるだろうか。(山中)

【註】

- (1) 既刊の報告は下記のとおりで、詳細はこれらを参照されたい。
 - 報告①『立岡山中世墓群埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 多気ニュータウン相可台』1997年 多気町教育委員会
 - 報告②『立岡山6号墳・明氣古墳群埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 多気ニュータウン相可台』1998年 多気町教育委員会
 - 報告③『石塚谷古墳・大日山1号墳・倉懸古墳群埋蔵文化財発掘調査報告 多気工業団地』1998年 多気町教育委員会
- (2) 今回報告の資料には、各古墳ごとに既報告資料に続く番号で表記をしたが、報告②に記載された遺物もあり、保存処理により形状が変化したものについては新たな番号を与える、法量が変化しなかったものについては既報告番号で表記した。この場合、報告①掲載を「I-O」報告②を「II-O」とした。
- (3) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981年)
- (4) 前稿「三重・古墳時代の馬文化」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第15-1 三重県埋蔵文化財センター 2006年)で報告しているが、その実測の際は引手の振りは確認できなかった。
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 河田C・E支群における耳環は必須品目的に各埋葬施設に副葬され、また製作技法的にも多様性が認められる。同じく河田B支群においては耳環の数量もさることながら、鉛製・錫製など表装使用金属に特性が見出せる。こうした河田古墳群の特性は薬師谷・ヒジリ谷・中野山古墳群(津市一志町)においても見受けられ、素環鏡板の馬具との共伴関係とも併せて注目できる要素である。
- (7) 河田古墳群ならびに薬師谷・ヒジリ谷・中野山古墳群(津市一志町)出土資料については多気町教育委員会・津市埋蔵文化財センターの厚意により資料実見の機会を得ることができました。記して感謝いたします。
- (8) 山中由紀子『横穴式石室出土馬具の基礎研究』(『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会 1997年)

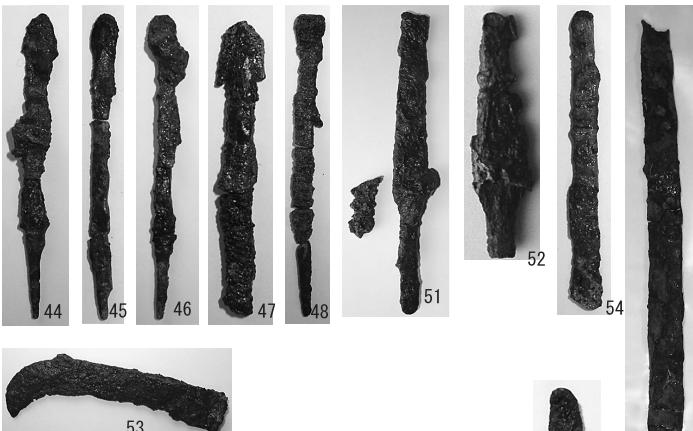


第16図 明氣8号墳埋葬施設出土状況図 (1:60)
(報告②に一部加筆)

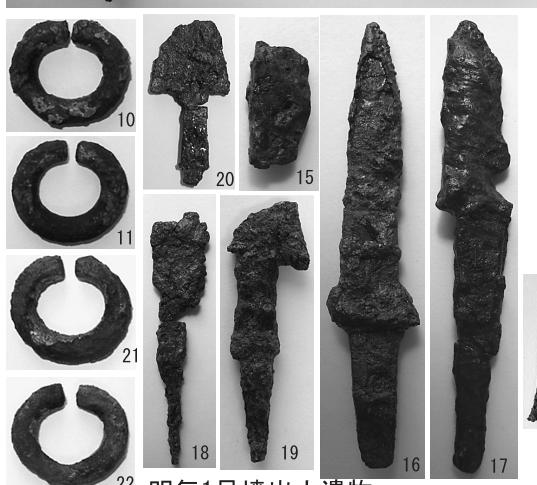
第17図 明氣6・7・8号墳 出土遺物 (1:3)



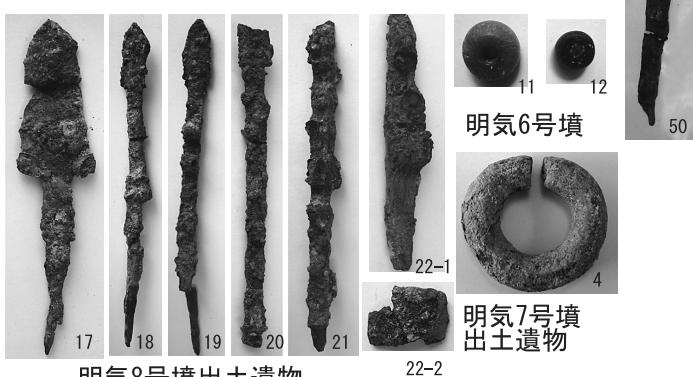
立岡山 6号墳出土遺物



14



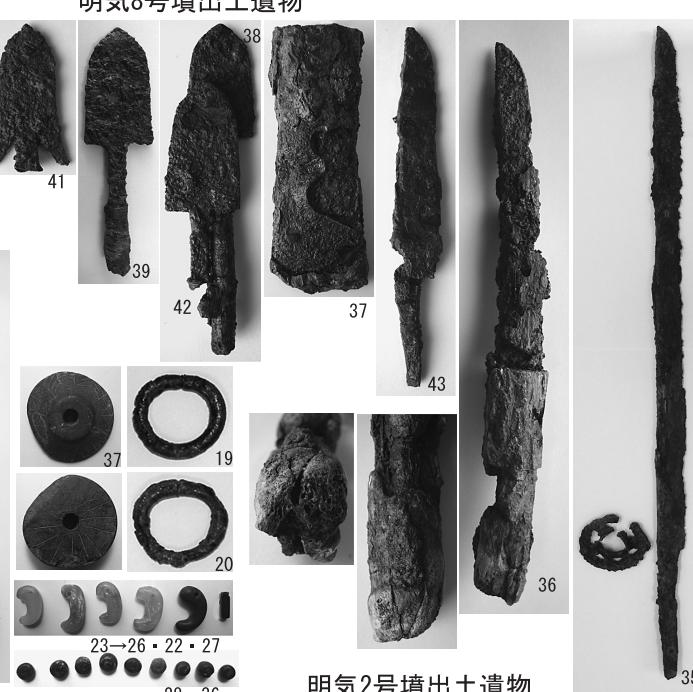
明氣1号墳出土遺物



明氣8号墳出土遺物



The image shows two pairs of ancient iron shackles or handcuffs. The shackles on the left are larger and feature a Y-shaped handle with a central loop and two side loops, each attached to a large circular ring. The shackles on the right are smaller and have a more traditional design with a vertical handle and a single large circular ring at the bottom. Both pairs show signs of age and wear.



明氣2号墳出土遺物

英虞湾周辺における中世製塩遺跡の分布について

山 本 達 也

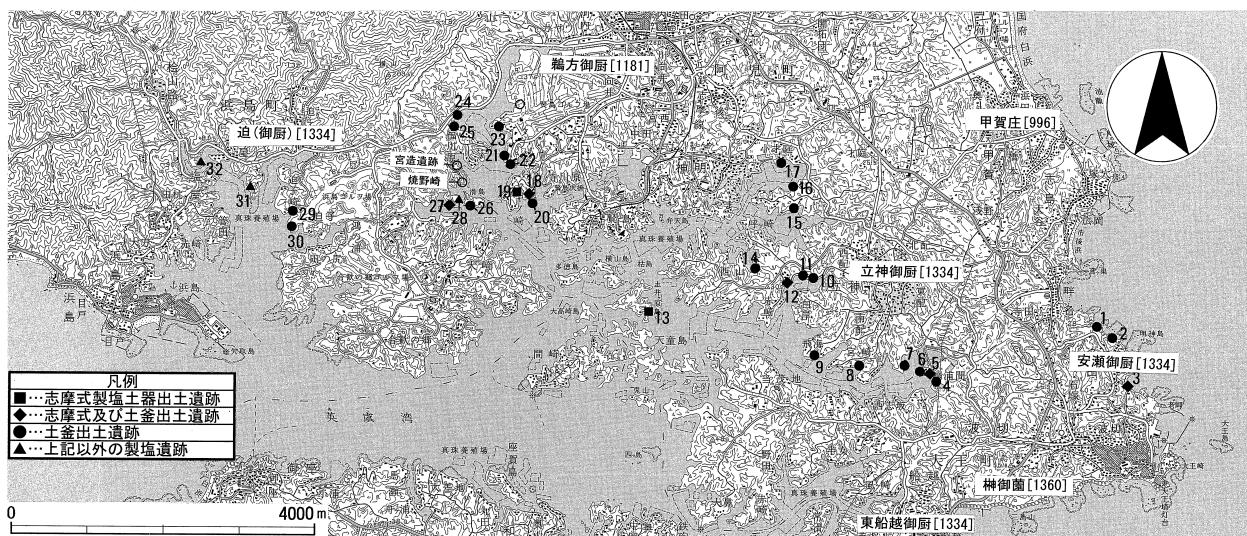
1 はじめに

志摩地域の製塩遺跡調査の本格的な調査を開始されたのは磯部町の伊藤保氏であった。⁽¹⁾ついで昭和43年に行われた、志摩市（当時志摩郡）磯部町所在の小海製塩遺跡の発掘調査により、鉄釜を使用する製塩炉が確認された。⁽²⁾それと同時に、同町内の城山製塩遺跡、塩崎製塩遺跡より出土した粗製土器についても検討を加え、これを塩の「煎熬容器」として位置づけ、「志摩式製塩土器」と命名された。さらに、志摩地方では古代末から中世初頭にかけて煎熬用土器と考えられる「土釜」と呼ばれる土製品が使用されるが、これとの関係について、同氏は「志摩式製塩土器→志摩式と土釜の中間型→土釜→鉄釜」という発達系譜を考えられた。⁽³⁾これ以降、志摩式製塩土器は煎熬容器であるとの見方が一旦定着し、これを継承、発展させる形で新田洋氏らの研究が進められることになる。そして山本雅靖氏の研究により詳細な型式分類がなされると共に、その使用法についても煎熬容器ではなく固形塩生産容器とする見地から、⁽⁴⁾生産・流通に一定の見解が示され、現在の研究の基礎となっている。⁽⁵⁾一方で土釜を利用した製塩については平成9年度に行われた紀伊長島町の道瀬遺跡の発掘調査で製塩炉が検出され、報告書で土釜に関する研究が整理された。⁽⁶⁾その後、大川勝宏氏は、土釜、製塩炉をそれぞれ三型式に分類され、その分布について考察すると共に、土釜の所属年代については山茶椀の型式から12世紀末から13世紀初頭に使用の上限を認め、下限は小海製塩遺跡例などから鎌倉末から室町時代ではないかとされている。そして、神宮の御厨、御蔵との関連について、「土釜製塩についても律令国家の衰退と在地勢力としての神宮との関係を考えなければ、この時期に顕現する当地域の製塩を説明する事はできない。神宮領である御厨・御蔵は当地でも開発が進められており、製塩炉が見つかった各遺跡も何らかの形で御厨・御蔵と関連づけられる位置にある。」と、御厨・御蔵との関係について述べられている。⁽⁷⁾その後、清野陽一氏らは紀伊長島町に所在したと推測される丹島御厨、中島御厨内での製塩の実情を検討し、操業が約百年間と短期間で製塩炉の発見数も少ないという状況から、恒常的な塩生産ではなく、御厨の貢納物として塩が生産されていたとしても非常に限定された一時的なものであったとし、御厨周辺の森林資源の活用も視野に含めてその消滅の考察をされている。⁽⁸⁾

平成17年には志摩市の立神高岡製塩遺跡の発掘調査が行われ、製塩炉の一部が検出されるなどしたが、その詳細な構造までは明らかになっていない。ただ、新名強氏はこの土釜片の出土状況などから、炉体や天井に角礫を用いた製塩竈上に土釜を据えたものではないかと推定されている。また、塩の生産者について牢人など他地からの入植者の可能性を提起されている。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

以上の研究は、紀伊長島町道瀬遺跡の発掘調査を出発点とし、土釜を用いた製塩について各種見解が示されたものであるが、実際に発掘された製塩遺跡が少なく、発掘されても不明な点が多いという制約から、多くの推論の上に成り立っている。また、遺跡数そのものも、当地域での海岸部の詳細分布調査が少ないので、本章では大川氏が「何らかの形で御厨・御蔵と関連づけられる位置にある。」としたことが英虞湾を中心とした地域でも当てはまるのか、当てはまるとすればどれほど明確であるか、そして道瀬遺跡やその周辺の製塩遺跡が12世紀後半から13世紀前半を中心とする、わずか100年程度の期間の操業とみられるような状況が果たしてこの地域でも当てはまる事象なのか考察してみたい。

なお、本稿の多くは拙稿『製塩遺跡の研究』（平成17年度皇學館大学博士前期課程修士論文）を基礎とし、その後の史料調査結果などを加えている。



第1図 英虞湾周辺製塩遺跡位置図 ($S = 1 : 100,000$) (国土地理院 1 : 50,000 「波切」「贊浦」より作成)



第2図 立神地区周辺製塩遺跡位置図 ($S = 1 : 20,000$) (阿児町都市計画図より作成)

2 英虞湾沿岸域における土釜製塩遺跡の分布状況

志摩地方の製塩関係資料は、山本雅靖氏の研究以降、紀伊長島町周辺の資料蓄積があるほかは、目立った増加を見せていない。しかし、前述のように伊勢・伊賀地域での志摩式製塩土器出土例は増加するといった状況で、志摩地域での実態解明が求められている所である。⁽¹²⁾そこで筆者は、志摩地方の全海岸を踏査して製塩遺跡を新たに確認し、志摩地方における製塩遺跡の実相を明らかにすることを計画し、2005（平成17）年4月より逐次踏査を行っている。しかし、遺跡の多くが海岸に立地するという事情から、干潮時でなければ調査不可能な箇所が多く、少しづつ調査を行なわざるを得ず、思ったほどの進捗を見ていない。さらに、英虞湾内、特に先志摩半島北岸などは海岸線の埋め立てによって真珠養殖施設が建設されている所が多く、砂浜自体が非常に少ない状況であった。的矢湾も状況はそれほど変わらない。一方、太平洋岸は、遺跡として登録されている場所はあっても、伊勢湾台風以降に建設された堤防などによって遺物包含層などは今となっては全く確認できない遺跡が大半であった。以上のような事情により、調査の中心と考えていた英虞湾内で一通り調査を終えた海岸は三割程度にとどまっている。

現時点で明らかになっている英虞湾周辺の製塩遺跡は一覧表及び第1図の通りである。一覧表中で山茶椀の後に附記した数字は藤澤良裕氏の編年の型式を示す。⁽¹³⁾なお、本文中で使用する遺跡番号は表・図1・2と共に通り、表でアミカケになっているものは全て新出のもので遺跡名は字名を元にした仮称である。

以下、遺跡が集中して見られる4地区の主要な製塩遺跡について見る。

①名田周辺地区（第1図参照）

大野製塩遺跡（1）は、名田集落北方の大野浜南端付近に位置する。土釜・土師器を採取した。平成16年度の堤防改修工事後に確認したが、大半が工事で破壊されてしまった可能性が高い。本遺跡南東約200mに位置する真名井神社裏遺跡（2）では、崖面に露出する、土師器甕（平安末）・山茶椀（4～5型式）、などが出土する同一の層位より、1点だが土釜片を採取している他、大井ノ浜遺跡（3）でも土釜が出土している。

②立神周辺地区（第2図参照）

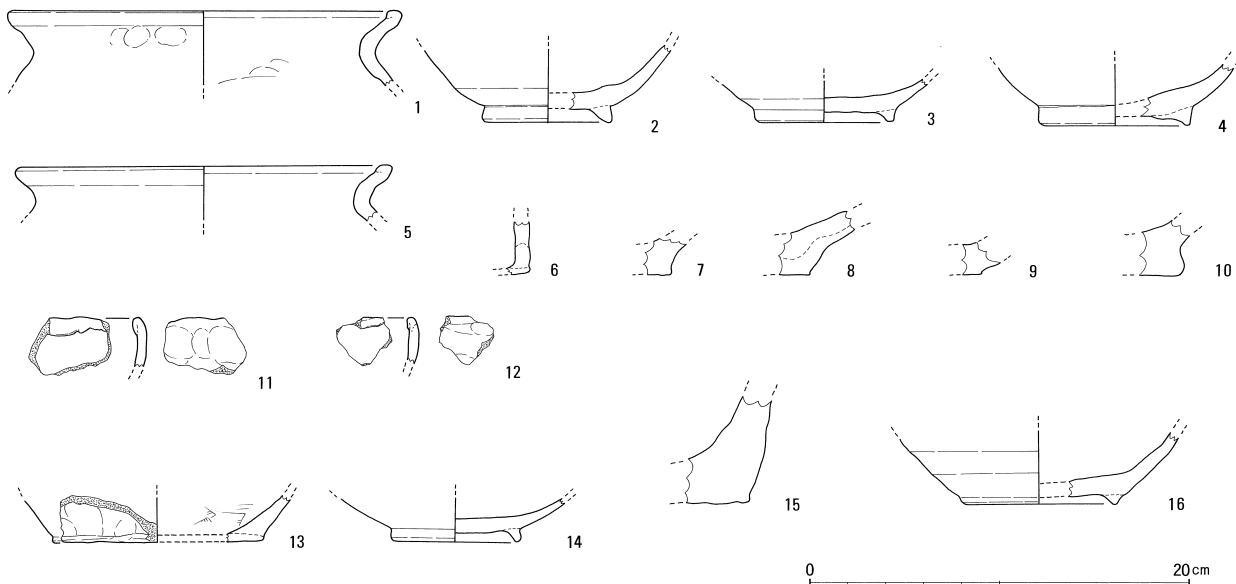
立神集落南方の阿鎌浦周辺には鰯浦間A～B製塩遺跡（4～6）・飯倉製塩遺跡（7）がある。鰯浦間B製塩遺跡では遺物包含層が海岸に露出し、同一の層位より土釜と志摩式製塩土器を採取している。飯倉製塩遺跡では土師器甕（第3図1）を採取している。立神高岡製塩遺跡（12）では発掘調査により16箇所の硬化面、土師器甕・山茶椀（4～6型式）土釜・志摩式製塩土器が出土している。筆者も山茶椀（第3図3・4）、土師器甕（同5）、志摩式製塩土器（同6）、土釜底部（同7～9）を採取している。この遺跡の西方には西神島A・B製塩遺跡（10・11）があり、海岸に土釜・焼け石が散布する。山茶椀（第3図2）を採取している。杓浦製塩遺跡でも土釜底部（第3図10）を採取している。集落の北方には小才庭A～C製塩遺跡（15～17）があるが遺構は確認されず、海岸に土釜・焼石が散布するのみである。土井ヶ原島遺跡（13）では従来知られていなかったが志摩式製塩土器（第3図11～13）を多数採取した。この他土師器・須恵器・灰釉陶器（同14）・黒色土器を採取し、焼け石も多量に認めたが土釜は全く見られなかった。

③鵜方周辺地区（第1図参照）

焼ノ崎製塩遺跡（18）は、古くからその存在が知られており、英虞湾内の製塩遺跡としては比較的良好な内容が分かっている遺跡で、脚台式製塩土器なども出土している。この遺跡の北方には宇島製塩遺跡（21）があり、土釜片（第3図15）を採取している。また、この近傍にてタチメ製塩A・B遺跡（22・23）を確認している。A遺跡のある岬は、「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」によると「この遺跡の南方に、大畠氏の真珠養殖場のある俚称「カマハナ」、観光ホテルの北方下の俚称「カマダニ」には、製塩の遺跡があり、その地名が物語っているが、焼石なども決して少なくない。」⁽¹⁴⁾とある。また、阿児ライブラリー所蔵の「字地圖 第十七区 鵜方村」（明治時代

番号	遺跡名	所在地	志摩式	土釜	その他遺物	遺構	備考
1	大野製塩遺跡	志摩市大王町名田字大野		○	土師器	焼石散布	H16年工事で全壊
2	真名井神社裏遺跡	志摩市大王町名田字うなた		○	土師器甕 山茶椀(4~5)		土釜片は1点のみ
3	大井ノ浜遺跡	志摩市大王町名田字大井ノ浜	B I 類	○	土師器 須恵器 山茶椀	炉跡	
4	鰯浦間 A 製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間		○	土師器	焼石散布	主要部堤防下か
5	鰯浦間 B 製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間	A類	○	土師器	焼石散布	包含層露出
6	鰯浦間 C 製塩遺跡	志摩市大王町波切字鰯浦間		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
7	飯倉製塩遺跡	志摩市阿児町立神字飯倉		○	土師器甕	焼石散布	主要部埋立て下か
8	宮ヶ崎製塩遺跡	志摩市阿児町立神字宮ヶ崎		○		焼石散布	主要部埋立て下か
9	白岸製塩遺跡	志摩市阿児町立神字白岸		○	山茶椀	焼石散布	包含層露出
10	西神島 A 製塩遺跡	志摩市阿児町立神字西神島		○	土師器 山茶椀(4)	焼石散布	主要部道路下か
11	西神島 B 製塩遺跡	志摩市阿児町立神字西神島		○	山茶椀(4)	焼石散布	主要部道路下か
12	立神高岡製塩遺跡	志摩市阿児町立神字高岡	A類	○	土師器甕 山茶椀(4~6)	製塩炉 6基	H17年度本調査
13	土井ケ原島遺跡	志摩市阿児町立神字土井ケ原	A I 類		土師器 須恵器 灰釉陶器	焼石散布	包含層露出
14	杓浦製塩遺跡	志摩市阿児町立神字杓浦		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
15	小才庭 A 製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	主要部埋立て下か
16	小才庭 B 製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
17	小才庭 C 製塩遺跡	志摩市阿児町神明字小才庭		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
18	焼ノ崎製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎	○	○	土師器 須恵器 灰釉陶器	炉跡	
19	焼ノ崎 B 製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎	?			焼石散布	
20	焼ノ崎 C 製塩遺跡	志摩市阿児町神明字焼ノ崎		○		焼石散布	主要部埋立て下か
21	宇島製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○	土師器甕 山茶椀	灰層・焼石散布	包含層露出
22	タチメ A 製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○	土師器 山茶椀(4~5?)	焼石散布	主要部埋立て下か
23	タチメ B 製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字タチメ		○		焼石散布	
24	長原 A 製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字長原		○		焼石散布	遺構浸食で全壊か
25	長原 B 製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字長原		○		焼石散布	
26	滑島製塩遺跡	志摩市阿児町鵜方字滑島		○	山皿	焼石散布	
27	畔杯山 A 製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字畔杯山	?	○	灰釉陶器	焼石散布	
28	畔杯山 B 製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字畔杯山			須恵器	炭・焼土包含層	包含層露出
29	安目浦製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字安目浦		○		焼石散布	
30	網引付島製塩遺跡	志摩市浜島町迫子字網引付島		○	焼土塊 山茶椀(6)	焼石散布	
31	蔵本製塩遺跡	志摩市浜島町塩屋字蔵本				炭・焼土包含層	鉄釜製塩? 近世か
32	寺廣製塩遺跡	志摩市浜島町塩屋字寺廣				製塩炉	鉄釜製塩? 近世か

遺跡一覧表（トーン部分は新発見の遺跡）



第3図 遺物実測図 (S = 1 : 4)

以降に作成?以下「字地圖」)には、本遺跡の所在する小岬に鉛筆書で「釜鼻」と註記があり、また遺跡東方の谷地は「釜谷」と記されているので「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」に記された地点が本遺跡であることは明白である。この地名がいつ頃まで遡れるかは不明だが、鈴木氏が述べられるように恐らく製塩に関わるものであり(近世にも小規模な製塩が行わっていた可能性もある)興味深い史料である。B遺跡では微細片であるが山茶椀(4~5型式?)を採取している。滑島製塩遺跡(26)は滑島南岸に位置し、遺物は干潮時に露出する砂浜に見られる。海岸には部分的に、炉跡と推定される被熱で赤変した岩盤が露出しており、遺構主要部は既に浸食されてしまったようである。表採遺物は土釜(煤が付着しているものがある)、山皿、炉の一部と思われる焼土塊があり、焼石も多数見られる。

阿児町と浜島町の境界となっている小岬は、「字地圖」によれば「焼野崎」と註記があり、神明の字焼ノ崎に所在する製塩遺跡群とその地名から考えると、ここにも製塩遺跡が存在した可能性もあるが、踏査では何らの遺物も確認されていない。ただ、この岬の北約200mの東向き海岸には宮造遺跡が存在し、志摩市教育委員会保管の「阿児町遺跡調査カード」によると、「開墾のとき炭灰が相当量出たといっている」とあり、ここは製塩遺跡である可能性を指摘出来る。

④迫子周辺地区(第1図参照)

安目浦製塩遺跡(29)は従来、大崎半島西岸における唯一の土釜製塩遺跡であったが、この南方に網引付島製塩遺跡(30)を確認した。山茶椀(6型式)(第3図16)を採取している。本地区における土釜製塩遺跡はこの2遺跡のみであるが、鉄釜を使用したと考えられる寺廣製塩遺跡(32)を確認した。海岸の北端に赤く焼け締まった製塩炉の一部と思われる遺構が露出し、周辺の岩盤も赤く変色している。炉の全体形状は不明であるが焼石が多量に認められる。付近には「釜ヶ谷」や「釜向ヶ」などの地名が見られ、同種の製塩施設が他にもあったと見られる。⁽¹⁵⁾

3 土釜製塩遺跡と莊園の分布

前節で述べた土釜製塩遺跡の分布と、当該地域の御厨の分布を第1図に示した。御厨については、『日本莊園データ1(畿内・東海道・東山道)』⁽¹⁶⁾によった。莊園名に併記してある数字は史料上の初見年である。これを見ると、立神御厨(神宮領。『神鳳鈔』初見)、鵜方御厨(神宮領。『神宮雜書』初見)、迫(御厨)(神宮領。『神鳳鈔』初見)の近傍に土釜製塩の遺跡が偏在する傾向があることが分かり、大川氏の指摘に合致する状況と言える。

立神御厨周辺の製塩遺跡は主な岬や入江ごとに分散しているように見え、一見散漫な印象を受けるが、これらはいずれも立神集落を中心とした半径約2kmの円内にほぼ収まり、集落に居住した生産者が集落縁辺部の海岸で生産に携わっていたと考えられる。立神集落各所では当該期以降の土師器・山茶椀の散布が認められる。そして、集落近傍のある一箇所に集中して生産施設を設げず分散しているのは、燃料確保のための山林(塩山)の領域の関係上、ある程度の間隔を置いたためであろう。或いは、新名氏が指摘するように他地からの入植者が製塩を行い、そうした生産者が集落周囲の海岸で生産活動を行っていたためにこのような分布になっているとも考えられる。「平家の落人が立神に逃れてきて最初に海岸で塩をつくり生活を始めた」という地元の伝承もこうした事実を一部反映している可能性があり、あながち軽視できまい。その場合、製塩施設と御厨の関係を再考する必要があるが、これは今後の課題としておきたい。

鵜方(厳密には鵜方浜と呼ばれる入り江付近)周辺では、比較的集中した分布を呈している。中心となった集落は現在の市街地に重なると思われるものの、はっきりとした範囲は分からぬ。また、鵜方浜最奥部は埋め立てが著しく、旧海岸線は踏査不可能な場所が極めて多いので、調査は必ずしも十分ではない。

一方で現在、立神と鵜方の中間に神明集落に明らかに付随すると見られる土釜製塩遺跡は見られない。神明集落周囲で中世前期の遺物や遺跡が確認されていないことからすれば、当該期には組織的に製塩を行うほどの人間

が住む集落が存在しなかった可能性が高い。『遺跡台帳』によれば集落内に「奈良時代以降」とされる貝塚が何箇所か集落内にあるが、「遺跡調査カード」などによれば、遺物は「甲賀式土器（概ね中世後期の南伊勢系土師器鍋を指す）」などがあり、土釜製塩が行われていた中世前期のものではないようである。

迫子周辺から塩屋にかけての地帯は、地名から調査当初はかなりの製塩遺跡数が考えられたが、土釜製塩遺跡は合計2箇所しか見られなかった。まだ大崎半島には未調査の海岸が多いことから、調査次第では更なる増加が見込まれるが、立神・鵜方周辺よりは小規模な生産であった可能性もある。また、その場合「塩屋」の語源は、こうした土釜製塩ではなく、恐らく近世の寺廣製塩遺跡に見られるような土釜を使用しない製塩施設からであろう。

以上の遺跡の内で古代末から中世の製塩遺跡は各遺跡の概要で述べた通り、年代の明らかなものは概ね11世紀代から13世紀中頃と思われるものであった。一方で、小海製塩遺跡の発掘で指摘されているような鎌倉末期から室町時代まで及ぶような事例は確認出来なかった。恐らく、小海製塩遺跡の場合、平安末から鎌倉初期の土釜製塩遺跡が存在したのと同じ場所に、室町時代に鉄釜製塩の施設が設けられたのであろう。以上のような動向は、前述したような紀伊長島町周辺の製塩遺跡の動向と概ね同じであり、このような塩生産が志摩半島～東紀州の莊園近傍においてほぼ同時に発生し、衰退したと考えられる。

4 おわりに

平安末期から見られる土釜製塩遺跡は、御厨との関係は以前から指摘されていた。しかし、紀伊長島町周辺の事例がそのまま志摩半島にも当てはまるのかという点は、磯部町を除くとはっきり確認されておらず空白地帯の様相を呈していた。この点について英虞湾沿岸の踏査により、数多くの新出遺跡を確認する成果を挙げるとともに、その遺跡の分布は御厨の分布とよく符合することと、操業年代も紀伊長島とさほど変わらないということが明らかになった。しかしながら、現時点での海岸部の踏査状況は到底充分とは言い難く、今後も継続して踏査活動を行ってゆく所存である。また、今回取り上げた新出遺跡の内容については紙幅の関係上、大幅に割愛せざるを得なかった。いずれ稿を改めて詳細を報告したい。

【註】

- (1) 伊藤保「磯部考古学」(『磯部郷土史』1973)
- (2) 磯部町教育委員会『小海』1976
- (3) この土製品については「塩崎式製塩土器」「土製平釜」等の名称があるが、本稿では「土釜」で統一した。
- (4) 近藤義郎「日本塩業史の考古学的研究」(『土器製塩の研究』青木書店 1989)
- (5) 山本雅靖「志摩式製塩土器考」(『考古学論集』第三集 考古学を考える会 1990)
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『道瀬遺跡（第1次）発掘調査報告』1998
- (7) 大川勝宏「紀伊半島における中世製塩遺跡」(『研究紀要 第9号』三重県埋蔵文化財センター 1998)
- (8) 清野陽一・西川麻野・服部英世「紀伊半島の製塩遺跡—御厨における塩生産—」(『紀伊長島町の研究』三重大学 2001)
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『立神高岡製塩遺跡』2005
- (10) 新名強「中世製塩から見た南伊勢」(『Mie History』vol.18 三重歴史文化研究会 2006)
- (11) 『紀勢町史』編纂にあたり、紀勢町（現・大紀町）の海岸部を含む町内全域で分布調査が行われているのが数少ない例である。
- (12) 西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器—研究の現状と課題—」(『シンポジウム製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』塩の会シンポジウム実行委員会 1997)
- (13) 藤澤良裕「山茶椀研究の現状と課題」(『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994)
- (14) 鈴木敏雄「志摩郡阿児町神明字「ヤキノ崎」の考古学的調査」(『郷土志摩』26 志摩郷土会 1954)
- (15) 迫子記念誌刊行委員会編『波座湖 迫塩の教育と民俗』(迫子財産区 1979)
- (16) 『日本莊園データ1 (畿内・東海道・東山道)』(国立歴史民俗博物館 1995)
- (17) 筆者の祖母の話による。

執筆者一覧

石 井 智 大 (三重県埋蔵文化財センター)
大 川 操 (三重県埋蔵文化財センター)
奥 義 次
川 崎 志 乃 (三重県埋蔵文化財センター)
小 濱 学 (三重県埋蔵文化財センター)
穂 積 裕 昌 (三重県埋蔵文化財センター)
山 中 由紀子 (斎宮歴史博物館)
山 本 達 也 (三重県埋蔵文化財センター)

研究紀要

第17-1号

2008(平成20)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 光出版印刷株式会社
